



始





幼年教育百話

大正
2. 5. 15
内交

自序

私は拾二年以前から「幼年教育」と題する小冊子を發行致しました
が、既に其の小冊子は百冊を重ねたのであります。言葉を更へて言へば
既に百の話を書き終つたのであります。

此の書物は其の百話を鄭寧に悪い處は訂正し又書き改へ可き處は書き
改へて今一冊の書物にしたのであります。

此の話の或るものは既に私の許を得て英語にも又獨語にも翻譯せら
れ、嘗に日本の子供ばかりではなく、米國及び英國の子供にも又は獨國
の子供にも愛讀されて居るのであります。

今日日本の社會の要求して居る文學は確かに子供の良い文學でありま
す、有體に言へば母や教師が子供に話したり、又讀ましたりする良い話

が少ないのであります。

此の百話は確かに其の缺乏を幾分か補ふ事が出来ると信ずるのであります。若し此の百話に依り日本否世界の子供達が良い子供に教育せらるる事が出来ますれば私の働は決して無益にならないのみならず、實に私の名譽であります。

二

大正二年一月下旬

巢鴨の寓宅にて

田村直臣

幼年教育百話目次

- 第一、新聞賣子
- 第二、蜘蛛の曲乗
- 第三、マツチ賣子
- 第四、酒の色染
- 第五、日光の幽霊
- 第六、びつこの獅子
- 第七、納豆賣の小娘
- 第八、子供の世界一週
- 第九、犬の博覽會
- 第十、按摩上下三百文
- 第十一、十二人養子

目次

-
- 第拾二、紙屑ひろひ
 - 第拾三、鶴の一聲
 - 第拾四、迷ひ子
 - 第拾五、一本の蠟燭
 - 第拾六、牛の乳配達
 - 第拾七、三人娘
 - 第拾八、小僧入用
 - 第拾九、猿の子
 - 第二拾、ダイヤモンドの谷
 - 第廿一、美い敵討
 - 第廿二、朝寝坊の結果

一

- 第廿三、五萬五千圓
- 第廿四、花のさむし
- 第廿五、愛の牢屋
- 第廿六、親友
- 第廿七、小娘の車の後押し
- 第廿八、鳩ぼつば
- 第廿九、舌車
- 第三十、鳥の大王鷲
- 第卅一、かたみの財産争ひ
- 第卅二、印度の子供
- 第卅三、すて子
- 第卅四、虎のいけどり
- 第卅五、朧月

- 第卅六、小供の勳章授與式
- 第卅七、羊の裁判
- 第卅八、難船
- 第卅九、親の命令
- 第四拾、自慢の指輪
- 第四拾一、蝗の大軍
- 第四拾二、山の大將已獨り
- 第四拾三、井戸鏡
- 第四拾四、ふくろの目玉
- 第四拾五、忍耐
- 第四拾六、猫騒動
- 第四拾七、美人島
- 第四拾八、學校の鐘つき

- 第四拾九、母の石碑
- 第五拾、顔自慢
- 第五拾一、松の木の音楽
- 第五拾二、美しい年の争
- 第五十三、雪さらひ小僧
- 第五拾四、眞の忠君
- 第五拾五、めくらのカナリヤ
- 第五拾六、五拾錢銀貨
- 第五拾七、天使と悪魔の顔
- 第五拾八、大飢饉
- 第五拾九、かきの初なり
- 第六拾、あふむの萬歳
- 第六十一、蜜柑廿五

- 第六拾二、ゆりの花
- 第六拾三、ぐじら船
- 第六拾四、二萬圓の眞珠
- 第六拾五、すみれの御紋
- 第六拾六、蟻の先生
- 第六拾七、木の葉の蝶
- 第六拾八、たこの枕
- 第六拾九、海戦
- 第七拾、螢の行列
- 第七拾一、ばらづくしの御馳走
- 第七拾二、感心な孤兒
- 第七拾三、蜂の女王
- 第七拾四、たつた林檎一つ

- 第七拾五、花の時計
- 第七拾六、蛇つかひ
- 第七拾七、許嫁の娘
- 第七拾八、雷ガラ／＼
- 第七拾九、三つの大勝利
- 第八拾、豚の書生
- 第八拾一、偽ダイヤモンド
- 第八拾二、天國への郵便
- 第八拾三、蜜蜂と蝶
- 第八拾四、雪よりも白い菊
- 第八拾五、象の鼻
- 第八拾六、かたはの愛國者
- 第八拾七、面白い花づくし
- 第八拾八、駝鳥の足
- 第八拾九、釘の跡
- 第九拾、鶯の卵子
- 第九拾一、おねむり小僧
- 第九拾二、蠅ぶん／＼
- 第九拾三、水汲み小僧
- 第九拾四、狗の身がはり
- 第九拾五、鳥の翼
- 第九拾六、おたまじやくしの尾
- 第九拾七、驢の乳屋
- 第九拾八、霧の鏡
- 第九拾九、雀のお使
- 第百、三ツ子の娘

幼年教育百話

巢 鴨 子 著

第一 陣羽織をきた新聞賣子

赤帽子を冠つた、子供の新聞賣子が新聞くくくと勇ましく、銀座通をかけたあるいて居りますと。

客「オイ朝報はあるか」

賣「ハイ有ります」

客「一枚呉れ」

と云つて大平にもなげ出す様に、一錢の銅貨をやつて、急いで、途中で新聞を開けて見て居りました。

賣子は朝から、一枚も賣れませんか、非常に困つて居つた所に、初めて今一錢を手に致しましたから、ニコ／＼と笑ひながら大喜で新聞／＼と云ひながら、馳て行きました。

客は新聞を、片手で読みながら、片手を懐に入れると、先程まで懐にあつた紙入がありません、これは「スリ」にやられたと思つて、キヨロ／＼とあちら、こちらを見ますと。

今し方新聞を賣つた、賣子が急いで走りながら何か懐中から出して、頻りと悦しさうに見て居りました。

客は、賣子にかけていく後ろから大聲で。

客「コラ新聞賣／＼」

賣子は之は又一枚賣れるかと思ひ喜んで、振向て見ますと、今一枚かつてくれた客が大きな、目玉をして、

客「オイ貴様は己の懐中物を取りはせぬか」

賣「イーエ決して取つた覚えはありません、旦那御笑談をおつしやつてはいけません」

客「馬鹿をいへ、證據があるぞ盗人め」

と言合て居りますと、そら「スリ」が捕まつたと誰れ云となく多勢の人々が、澤山集つて参りました。

其様子を見て居た新橋交番所の巡査が馳けつけて、争つて居る二人を交番までつれて参りました。

巡「一體あなたは如何なされたのですか」

客「私は横濱の商人西村と申す者です、只今此小僧から、新聞を一枚買ひました所、後で懐をさがして見ますと、大切な紙入が見えませんが、驚いて今の新聞賣に盗れはせぬかと、思て其賣子の後を見ますと、懐から何か

出しながら馳て行きますので、只今談判をいたして居つたところでありま
しす』

巡「左様か……小僧手前の名前は何と申す」

實「へい、本多正一と申します」

巡「貴様は此人の紙入を知らないか」

實「他人様の紙入などは如何して私か」

巡「デモ貴様は懐中から何か出しながら、馳つていつたではないか」

實「私は盗人ではありません」

巡「貴様は如何しても知らぬと申すか、あまり強情を通すと裸體にしてはけの
皮を現して見せるぞ、早く有り體に白状いたせ」

實「知らぬ事は死んでも知りません、いくら貧乏をしても他人のものを取る様
な本多正一ではありません」

巡「強情な小僧だな——」

といひながら無理やりに腰にしめて居りました、さんじやくを解いて、あかだ
らけの色のさめた、紺のはつぴを脱せますと下には古い錦繡の陣羽織をきて、
一枚の女の寫眞をふところにして居りました、他にはいくら索しても何にもあ
りませぬでした、巡查も、側に山の様に立つて見て居りましたものも、驚いた
も驚いたも非常に驚きました、賣子は少しも恐るゝ氣色もなく、言葉やわから
に、目に涙を浮かべながら。

實「私は五才の時にお母さんに別れた不幸の者であります、此寫眞は私の
お母さまの寫眞で、いつも懐中に入れて何か喜ばしい事か、悲しい事がある
と此のお母さんの寫眞を見て、お話を致すのであります、今日は朝から一
枚も新聞があいにく賣れませんから非常に困まつて居りました時に、この
旦那に一枚買つて戴きましたから、非常にうれしくつてたまりませんから

この寫眞を見ながら母と御話をして居りましたのであります。
 又此の陣羽織は昨年お父さんは永らくの病氣で有るものは皆な賣りつくしてしまいましたが、此の陣羽織は昔關ヶ原の戦功により私の先祖が、家康公から戴いた寶物でありますから、死に際に私をよんで何程貧乏しても決してこれを賣てはならぬ、何時もこの陣羽織を着て、武士の家に傷をつける様な事をしてはいけぬよと、云ふて下さつた陣羽織であります。
 私も今は新聞賣子までおちぶれましたが、血統は武士の生れであります、夫に近頃は聖書を讀んで居りますから、盗みなんかは神様にも、先祖にもすみませんから決して致しません』
 と、言葉明かに述べましたから、訴へた西村はいふに及ばず、側にガヤ／＼、ワア／＼と騒いで立て見て居りました彌次馬連も此話を聞きまして大變に感心いたしました、誰れ一人として涙を流さなかつた者はありませんでした。

巡查も西村もさまり悪るさうな顔をして、自分達の考へ違ひを新聞の賣子にあやまつて居りますと。
 見物人は

『新聞一枚呉れ。』己れにも『己れにも』
 と、云ふて又おもしろい様に手に持つて居りました新聞を殘らず賣り盡して終いました。親孝行の新聞賣は災が幸となり一日かゝつて賣る新聞をまた、く間に賣つてしまひました。

第二 蛛蜘蛛の曲乘

高等小學一年生の正太郎と云ふ、十二三歳位の子供が、始めて、博物學を今年、先生から教へられたと見えて、自分の下の級の子供にあふとしきりに、毎日蜘蛛の話をして聞かせますから、仲間のものは誰れ云ふとなく。正太郎と云

はずして、蜘蛛太郎とあざ名する様になりました。

或日、七八人の子供が、下谷竹町の角で何かして遊で居りました。

鉄直「今に向ふから蜘蛛ちやんがやつてくるぞー。」

信太郎「きつと今日もおいらに蜘蛛のはなしをするぞ。」

梅吉「正ちやんは蜘蛛太郎と云はれる丈けあつて、中々色々な蜘蛛のお話をよく知つて居るよ。」

三郎「自分でも蜘蛛の學者になると云ふて居るよ。」

重雄「正ちやんの家について見給へ、蜘蛛を澤山捕へて来て、机の引出に入れて居るよ。」

藤一郎「其れに先日阿父から、大變たかい顕微鏡を買つてもらつて、何んだか毎日、玻璃板に蜘蛛の手や、足をはりつけて見ているよ。」

正七「僕は世の中に、蜘蛛程いやな、醜い妙な虫はないと思ふよ。」

常太郎「君馬鹿を云ひ給ふな、君はまだ、顕微鏡で蜘蛛を見た事はあるまい、昨日僕は正ちやんの家に行つたら、顕微鏡で蜘蛛を見たまへと云ふから、見せてもらつたら、始め豆粒の様な蜘蛛を、玻璃板の上にのせて、鏡の中央に置いて、さー、見たまへと云ふから見ると、豆粒の様な小さな蜘蛛が、上野の動物園で見る熊の様に見えるたよ。」

正七「君こそ馬鹿を云てる、豆くらの蜘蛛が、熊ほど大きく見えるものか、其では目も、口も、足も大きく見えたらう。」

常太郎「躰には、らつこの様な立派な、厚い毛を被ぶつて居て、頭と云つたら躰に不相當な頭だよ、眼を数へて見ると云ふから、二つしかないと思つて数へて見たら驚いたよ、一つ二つ三つ四つ五つ六つ七つ、八つあつたよ、蜘蛛は八つ眼だよ。」

正七「足は如何だつたか。」

常太郎「何本も長い足があるが、足で手の兼たいをするせ、足の先端に二本の指と一本の親指があるが、何んでも自由に、捕へる事が出来るよ。」

正七「網を張るに、糸は如何して出すのだよ。」

常太郎「鉢の真中頃に、其れは〱奇體實に驚く程よく出来て居るよ、あの君等のよく見る蜘蛛の細い一本の糸はねへ、五千本の細い糸から成て、一本の糸に成て居るのだよ。」

正七「ウン、そうかねー、眼で見るとは大變な違いだねー、僕も明日でも正ちゃんの家に行つて、見せてもらをー、醜い虫でも馬鹿に出来ないな。」

常太郎「馬鹿に出来ない處ではないよ、正ちゃんから聞くと、物理学といふものは中々面白いよ、僕等も來年は、學校で學ぶ事が出来るよ。」

三郎「常ちゃんも中々、蜘蛛の話はよく、出来るぜ、正ちゃんのお弟子になつたな。」

鉄吉「其れ見給へ、向から蜘蛛ちやんが、やつて來た、何だ網の様なものを持って居る、あの網で蜘蛛を捕へてあるくんだよ。」

信太郎「如何だ、今日は僕等から、依頼んで、蜘蛛の話をしてもらをうではないか。」

と云ひますと、一同は、信太郎の云ふ事に賛成いたしました。

信太郎「蜘蛛ちやん、いや正ちゃん、僕等は今君の來るのを待つて居つた、今日は僕等から頼むから、面白い蜘蛛のお話をして呉れ給へ。」

正太郎「いや、めずらしいなア、何時も僕が蜘蛛の話をするよ、又かと云ふ様な顔をして、中々聞かないのに、今日は君等からたのむのか、其れでは、蜘蛛の曲乗と云ふ面白いお話をして聽すから、よく聽き給へ。」

と、申してこれより、蜘蛛の曲乗の話を始めました。

「蜘蛛には色々の役目のくもある、網を張る蜘蛛もある、大工をする蜘蛛

もある、食物を運ぶ蜘蛛もある、番人をする蜘蛛もある、又岡に居る蜘蛛も居るし、池の邊に居る蜘蛛もあるが、如何な蜘蛛でも、生れながら、神様から勉強家に作られたものであつて、蜘蛛の内には君等には少し耳がいたいかならんが、怠けものはない、蜘蛛は生れるとすぐ働き始めて、死ぬまで何んな事があらうと、誰が何んと言ふが平氣で、一生懸命に働くのである、恐らくは蜘蛛程勉強家はないと思ふ、勉強家の手本がほしくば、蜘蛛が一番よい手本だ、これまでが序文でこれから蜘蛛の曲乗である、一寸一息としやう。

今日、上野の忍ばすの池の側に来ると、池の中から大な蜘蛛が、ノコノコとやつて来たから、其蜘蛛を捕へて、棒の先にのせて、出来る丈け遠く池の中に建て、如何するかと、じつと見て居ると蜘蛛の奴は、淺草の見せ物でやつて居る様に曲乗を始めた、第一に其の棒の先から、いきなり

倒に下りて、水邊までやつて来たが出て行く途がない、其れから其棒の周圍をぐるり二度も三度もまわつて見たが、これでも出る途がないから、再び棒の先端まで登つて暫時中休みをして居た様であつたが、其れから又直ぐ愉快な曲乗を始めた、棒の先から、下にぐるぐる圓く糸を張り始めた、間る間に大きな、岸にとく丈けの網が出来た、其網が風に吹かれて、丁度旗の様に空に、此方に動き彼方に動きして居つたが、蜘蛛の奴は其網の上を、彼方に走り、此方に走つて、棒の先からトン／＼／＼網の先までやつて来て、これで曲乗は終いと云ふ様な顔をして、身を軽く岡に飛び下り、ニコ／＼／＼と自分の家に歸つてしまつた。

聞て居た子供等は皆んな、手を打てド！と笑いました、これは面白い、蜘蛛の奴は中々懶公だ、中々偉、僕等も蜘蛛に恥ぢない様に、遊んでばかり居らないで、勉強しやう、と云ふて一人去り二人去り三人去り遂に七八人の小供は皆

んな家に歸て一生懸命に勉強を始めました。

第三 マツチ賣子

處は何んでも日本橋三越呉服店の近所と思ひました、大へん大な銀行の入口の石段の中央ごろに、丈のすらりつとして、立派な長い髻のある洋服を着た、旦那と手にかばんをさげた、番頭らしい、商人風の男と何か笑いながら、しきりと話をして居りますと、其處へ襦袢を被た、顔は垢だらけの十一二歳位の小供が

小「旦那……マツチを一包買つて下さい。」

旦那はしきりと話をして居りましたから、振り返りもしないで、はなの先で、

且「いらぬよ。」

小「旦那、左様おつしやらずにドウカ、買つて下さい、旦那願ひます。」

且「マツチは澤山もつて居るよ。」

小「たつた一包一錢です、ドウカ旦那、御しやうです。」

且「ウルサイチ、いらぬいと云つたらいらぬよ。」

小「では、附木を添へますから、どうか買つて下さい。」

且「價が高いといふんではないよ、あるからいらぬよ。」

小「誠に困りますから、助けると思つて、旦那何卒願ひます。」

と、あまり、うるさく頼みますから旦那は

且「では、いらぬけれども、一包買つてやらふ。」

小「ドウモ、あり難ふ御座います。」

旦那は手をかくしに入れながら、

且「イケナイ、イケナイ氣毒だが、一錢銅貨がない、これ見な二十錢銀貨や五十錢銀貨よりしかない、又にしやう。」

小「デハ、チョット、取換て参ります。」

且「宜しひそれなら、取換たらつりはあの向に見える、梅屋と云ふあんどん
の出ている宿屋にもつてきな、二十銭だよ。」

小供は非常に喜び、鬼の首でも取つた様に、一生懸命に日本橋通をさして駆け
て参りました。

旦那は話を終へまして宿屋に歸つて一時間も過ちますけれども、先の小供は
つりを持って来ません、これは一番あの小供に食せられたかしらん、然しあの小
供は如何にも、正直らしく見へたが、まさか己を偽しはしまい、と思ひながら
用達に外に参りましたが、夜になつて歸つて参りますと。

下女は晩の御膳をもつて参りまして、

お雪「旦那おそくなりました、何卒、召上て下さ。」

且「お雪ちゃん、私の留守の内に十二歳位の子供が私を尋ねてきよしな

か、チー。」

お雪「イーエ、参りませんでした。」

といひながら下に何か取りに行きました。

且「其れでは、いよく一杯、食つたか知らん。」

と獨り言を云ひながら、御飯を食べて居りますと。

衣服と云ふたら前の小供よりは一層ひどい、穴だらけの衣服をきて、寒いのに
すはだしで、九つ位の一人の小供が、宿屋に入つてきて。

小「モシ、モシ。」

お雪「何んか、用かへ、乞食は御無用だよ。」

小「私 は乞食ではありません。」

お雪「ヲヤ、そるかへそれは失敬、それでは何の用事かへ。」

小「私 は先ほど、マツチを買つて下すつた、旦那様に御目にかゝりに参り

ました、お家にいらつしやいますか。』

お雪「オヤ、おまいかへ、いらつしやいますよ、今御膳を食上つておいでな
るよ、何か御用かへ。』

小「何卒、先きのおつりを持って参りました、とおつしやつて下さる。』

お雪「左様かへ、そんなら、一寸お待ち。』

といひながら、ドンドンと二階に昇り

お雪「旦那へ、汚い衣服をきた小供が参りました。』

旦那は「来たか」と云ひながら下におりて、子供をみますと、先の子供とは違
つて居ります、旦那は少し驚た風でした。

小「マツチを買つてくださった旦那はあなたで御坐いますか、先程はどうも
ありがとうございました。私 は先頃のマツチ賣の弟です、御存じでも
御座りませうが、私の父はコレラ病にかゝつて昨年死に、母も續てコレ

ラが移つて又死でしまいました、不幸に不幸が重り、兄さんと私と僅た
二人、残されウン……ウン、被ものも抜ず、食るものも食ず、二三日居り
ましたが食べなくつては死んでしまいますから、兄さんは毎日マツチ賣を
して、僅少づゝの錢をもうけ、私は人の御使などをして、僅少づゝのお
錢をもらひ、毎日たべるものは堅パンと、焼芋ばかり、腹はへるし、衣服
はなし、ウンウンウン、今日も兄さんが、あなたにマツチを買つて、戴い
たおつりを上やうとして、驅けてきた途中、三越呉服店の隅で、電車に引
かれて、足の骨は折れ、頭は碎かれて、氣絶いたしました。有り難い事に
は巡査の御世話で、あの先の病院に連れ込まれて、お医者様の御親切
な御陰で、息を吹き返しました、今私が病院に驅けつけて見ますと、丸
い目を開けて、何にも云はないで、血だらけの手で、「茲に十九錢のおつり
が有るから、早くあの、梅屋といふ宿屋に、おいでなまる、旦那に持て行

「け」と、いひますから、直ぐと参りましたが、ドウモ遅くなつてすみませ
ん。」

し、ウンウン……泣きながら語りました、旦那は云ふに及ばず、側に就て就た
下女のお雪も、お竹も、番頭の和助も、皆んな眼から、時ならぬ雨を降らしま
した。

この旦那は非常な親切なお人でありましたから、直ぐ二階に上つて帽子をも
つてきて、其子供と一しよに、兄の居る病院に参りました、行つて見ますと、
ねだいの上で、死んだ様になつて寝て居りました、旦那はねだいの傍によりま
すと弟は大聲で

「兄さん、オイ兄さん、先頃マツチを買つて下さつた旦那様がおいでになつ
たよ兄さん兄さん」とよびました。

兄は眼をバツチリと開けて、苦しうな聲で、

「ハイ、アノ、先程は有り難ふ存じました、おつりがおそくなりまして、す
みません、おつりをおかへし申して安心いたしました。

御母さんがコレラ病で、お死なされる時に、どんな貧乏をしても、決して
不正直な事をしてはいけない、と云ふてお死になりました、アゝあなた様
に、おつりを返して安心いたしました、もう私は死んでも宜しう御座い
ます、然し唯だ一つ氣にかゝるのは弟です」

と云ひながら涙を、ポロリ、ポロリ、と流しながら、息が何んだかおそくなり
始めました、旦那は大聲で、

「心配をするのではないよ、私が弟を助けてあげるから、神様に確かりと
頼てお出でよ」と申しますと子供は

神様といふ聲を聞いて目をバツチリと開けて、ニコニコと笑つて

「有り難う……神様に確かり、たよつて居ります」

と云ひながら、安すくと、寝ひるが如くに、弟の手を握りながら死んでしまひました。

二二

第四 酒の色ぞめ

八つ位になる長松といふ、男の子と、十歳位のお梅といふ女の子が、学校から、歸つてきて、

長「お母さん、お母さん、明日学校の運動會だから、靴を一足買つて下さいよー、皆さんが靴を穿いて居るけれども、私は唯だ獨り草履だからさア。」
お梅「わたしにもお母さん、袴をこしらへてちょうだいねー、皆さんが袴をはいていらつしやるに私し獨り、袴をはかないから、さまりが悪いわー。」
と、長松とお梅はしきりに、お母さんにねだりますとお母さんは、

母「あゝほしからう〜、私も人様の御子が靴を穿いたり、袴をはいて、

いらつしやるのを見ると如何して靴の一つや袴の一つ位は、私の子供にも、はかしてやりたいと思ふのは、山々であるが、悲しい事には子供に袴を買てあげる、お金のないのには困ります」

と、申しますと長松とお梅は口を揃へて

「だつて、お母さん、お父さんは毎日お役所に出て、お金をおとりなさるではありませんか」と申しますと母は

母「お前の云ふ通り、おとつさんは、かなり月給をおとりなさるけれども其お金は大抵、あの向の棚にある、徳利のなかに退入てしまひます、あの徳利のなかに、はいる丈のお金が毎月あれば、家主から家賃の催促を、受ける事もなく、米屋から拂の矢の催促をされる様な外聞の悪い事もなく、お父へ達らしくに、靴の一つや、袴位は買つてあげる事が出来ます、酒のお影で、愛らしいお前へ達まで貧乏をさせます。」

と、言はず、語らず、子供達におうきくなつても酒なんかは、飲んでではならぬ事を教へて聞かせました。

長松とお梅は、お母さんのいふ事を、ありのままに信じましたから、或日二人、相談の上で、棚から徳利を、おろして、庭先の大きな石で、コツリ／＼と一升徳利を破して居りました。

すると、お父さんは、一杯きげんで、赤い顔をして酒の香を、ブン／＼さして、家に歸つて来て裏口の方を見ますと、二人の小供がしきりと、徳利をこわして居る處でありました。

父「お前達は何をいたずらして居るのか、徳利をこわしてる。」

長「おとつさん、此の徳利の内には、澤出のお金が入つて居るから、靴や袴を買つて、もらをうと思つて、今こわして居る處です、お父さん、いくら位此の徳利にお金が入つて居るでせうねー。」

と、言はれてお父さんは少し閉口いたしました、其で中々酒をよして、子供に袴や靴を買つてやる事を、いたす様子はありませんでした。

ある夜の事でありました、お父さんはぐだぐだに酔つて、何處でか喧嘩でもしたものと見え、非常な立腹で家に歸つてきて、罪もないお母さんに八つ當りに當り、あげくに、たゞいたり、けつたりして、正體もなく死人の様に倒れて、寢てしまいました。

二人の子供は泣く、お母さんの側に近より、ひざや、肩に依りすがり、がんせない子供心で、お母さんを慰めました、するとお母さんは、長松とお梅の二人をかへ、

母「お父さんは、お酒の爲めに私をあつた通り、ひどい目におあわせなさるか
ら度／＼、いつそこの事、家を出てしまをう、と思つた事があるが、若し
お母さんの出た跡で、他のお母さんがきたら、お前達が如何なるであらふ

と、お前達が愛いばかりに、どの様な、辛い事があつても、此家を出る事はいたしません、嗚呼憎いものはお酒である、嗚呼この世にお酒がなかつたならば、どの位い、善く家が治まるかも知れん、然しいくら此世にお酒があつても、お父さんの心さへ變れば、家がよく治まつて行きます、此上は神様に祈つて、お父さんの御心が、變つてお酒を飲まなくなる様に三人で、一つ心になつて、夜も晝も祈りませう。』

と、御酒飲の心を變へさすのは、神様の力でなければ、出来ない事を教へました。

次の日、お父さんは役所へ行かふと思つて、出やうと致しますと、入口で二人の子供がしきりと、手洗の内に白い布を入れて、何だかそめる様に、其白い布をあげたり、浸したりして居りました、見ると、其手洗の内に酒が入つて居りました、驚いて父は、

父「おまいは、何をして居るのだ。」

お梅「私は、人形に着せる衣服を赤く染めているのよ。」

父「馬鹿をおしでないよ、酒で赤く染りはせぬよせ。」

お梅は不思議さうに、お父さんの顔をながめながら、

お梅「だつて、お父さん、お酒を飲と、お父さんは、しやうじよりの様に赤い顔におなりなされるではありませんか、飲んで赤くなるならば、白い布をつけても赤くなりさうなものではありませんか。」

と、子供の理くつにはお父さんも一言の答をする事が出来ませんでした。

父も役所に参りましたが、どうも平常の様でなく、何んだかしきりとふさいで居りました、友達から酒飲に行くことを勧められても行く勇氣もなく、いつもよりは、早く歸つて酒の氣なくて、めづらしくも寝てしまいました。

然し何日程、寝やうとしても寝られません、心に針がさした様に、今まで酒

故に罪もない、妻をぶち、恥しめた事や、愛い、子供は、袴一つ、靴一つかつてやる事の出来なかつた事や、人と喧嘩をした事、などを思ひ、心がチクチクとして、どうしても、寝る事が出来ません、もう、上野の二時の鐘がポーンと聞へましたが、それでも、寝られません、考へれば、考へる程、酒の恐しい事が、解つて参りました。

次の部屋でチン／＼と三時がなつてもまだ寝られませんが、世間はシーンとして、鳥も寝て居る時分に何んだか、かすかに子供の聲えが聞えます、よく耳を立てて聴きますと、確かにお梅の聲です、

お梅「天にまします神様、さつとお父さんがお酒をよす様にして下さい、アーメン。」

父はこの子供の祈を聞いて、其夜、其時より断然酒を飲む事をよし次の日から新人となりました。

第五 日光の幽霊

勇七と云ふ十一位の男の子が、學校から息をさらしながら、苦しうに、青い顔をして家へ驅けて歸つてきました、お母さんは勇七の様子を見ながら、

母「勇七や、お前はどうしたの顔を青くして、又お友達と學校から歸り途中で喧嘩をしたんだチー。」

勇「イーエ、今日は喧嘩はしません。」

母「では、気分でも悪いかエー。」

勇「イーエ、気分も悪くはありません。」

母「では、青い顔をして、どうしたのかエ。」

勇「お母さん、今日學校で先生が修身のお話の内に其はこわい、幽霊のお話をなさつたのを聞いて、こはくてたまらないのに、今龜ちゃんや専ちゃん

や米さんと、一緒に學校から歸つて来た途中で龜ちやんの言ふに、四五日前に、あの竹町の乾物屋のおかみさんが盜賊にひどいめに逢つて殺されたが、其晩から毎晩十二時頃になると幽霊になつて御亭主や、子供に逢いに來るそうだとサア。

専ちやんのお父さんも昨夕一時頃、あの家の角を通つたら、青い火の玉がどぶの内からヒラリ、ヒラリと飛だしたから、一生懸命にげ出したとサア、米ちやんは芝居で幽霊の出るのを見たそうだが、出る前に青い火がヒラリ、ヒラリと輝くと、白い衣服をきた、髪を長く垂した女が手をニユーとさげて、ヒユウ、ドロドロと出るさうだとサア、其話を聞いてから、俄に恐くなつて來たから、龜ちやんや専ちやんや米ちやんに別れてから一生懸命になつて驅て來たから、それで顔が青いのでせう。

お母さん、誠實に幽霊なんか出るものですか、私はもう恐くつて夏

の休中にお父さんと一緒に日光に行くのが、いやになつた。幽霊の話聞く前には非常に楽しんで待ていましたが、もう幽霊の話の事を思ふと遠方に行くのがいやになつた。』

母「誠實に、學校の先生が幽霊の話を、多勢の小さな小供にお話になつたのかエー、困つた事チ、先生も悪いお氣でお話になつたのではあるまへけれども、幽霊といふものは、決してあるものではない。人には神経といふものがあつて恐い／＼と思ふと、なんでもないものまでが、恐くなつて見へます。

つひ先日に向ふの横町の裏に幽霊が出るといふから、夜一時頃見に行つたら、白い、ゆかたが、乾し忘れてあつたのを、人が幽霊だ、幽霊だと騒ぐんですもの。

幽霊も人が恐い／＼と思ふ頭から出るのである、誰が何をいふても、自

分の頭に恐いと云ふ事がなければ、決して幽霊などといふものはありませ
ん。

男「でも、夜、枕もとから、ヒュー、ドロドロ……と出るそうだ、恐くて恐
くてたまらない、日光行はもういやだ。」

母「お前は太變お病になつたネー、恥かしひではないか、お前の名はなん
といひますか。」

男「勇七」

母「勇といふのは、如何いふ意味なの、又七といふのはどう意味か。なぜお
父さんがお前に勇七といふ名を附けたか知つて居りますか。」

男「へエー私の名になにか、意味があるのですか、聞いて下さい。」

母「勇といふのは、強いといふのです、七、といふのは、全といふ事で、
お父さんがお前は強い者に成つて國の爲めに盡す様に思つてお附なされた

のです、お前も名に恥ない様に幽霊なんかには、恐れてはいけません。」

男「では、お父さんと御一緒に夏の休みに日光に連れて行つてもらひませ
う。」

四五日たつと學校も休みとなり又、お父さんも、役所が休みに成りましたか
ら、勇七を連れて、上野のステーションから、汽車に乗て、六時間ばかり經て
漸く、日光のステーションに着きました。

勇七は始めて日光に参りましたから、見るものが何んでも珍らしいのです、
清い流れ河を見たり、朱塗の橋を見たり、杉の木の大木を見たり、立派な宮を
見たり、家康公のお墓を見たり、大きな瀧を見たりして、非常に感心いたしま
した。

男「お父さん、日光を見なければ結構といはれないといひますが、私はもう
今日から結構といへますねへ。」

父はほゝ笑みながら、

父「そうとも、そうとも、今日からもう日光を見たから、結構と云へますよ。」
と云ひながら、静なる山中の宿屋に連れて参りました。

一日中、汽車に乗つたり、見物をしたりして歩きまはしましたから、大變に疲れて、夕飯を食へて居りますと、日光の名物の雷が俄にガラ／＼と轟き始めました、すると夕立がド／＼と殆んど家も顛り返る様に大變に降つて参りました。

勇七は少し恐くなりはじめましたが、それとは云はずに、いそいで寢床をとつてもらい、氈布を頭から被つて、恐は恐は臥てしまいました。

父は、わざと次の部屋に寢床をとらせて臥てしまいました。

夜の一時頃、何時も眼をさました事のない勇七は、風が木の枝にサワ／＼とさわるをとで、めづらしくも眼を醒しますと、真白な衣服をきた幽霊が、静に

枕邊に立て居りました、そら先生のお話の幽霊がやつて來たと、非常に恐くなつてきました。それから氈布を頭から被つてしまいました、ふとんの内で幽霊は何をするかど、じつと考へて居りました、すると幽霊はだんだんと頭の邊に、やつて來た様です、勇七は考へ直しました、先生は幽霊のお話をなさつたが、お母さんは幽霊と云ふものは、決してないお病が幽霊を作るとおつしやつた、して見ると今枕邊に居る幽霊は幽霊ではなくつて、自分で恐い恐いと思ふ心が作り出したかしらん、一番此幽霊の正體を顯してやろうと思ひました今まで被ぶつて居たふとんをはねのけ、手に枕を握つて立ち

男「ヤイ、幽霊、己れの名は勇七と申すぞ、世には神様の外に恐いものはないぞ。お母さんのおつしやるには幽霊といふものは決してない、恐い恐いと思ふと何んでも恐くなるとおつしやつた、幽霊正體を顯せ。」と

手に握つて居つた枕をドスンと投げますと、枕はまどの障子に當つた、その

はづみにパツとはずれました。

すると、寝た時まで降つて居つた雨は、もはや止み、風は黒雲を吹きはらつて、満月は空高く登つて自分の寝て居つた部屋に、晝の様に輝いて居りました、今まで真白の衣服をきて居つた、幽霊と思ひましたものは、光々と、輝いた月でありました。

幽霊と思ひました其月の光で勇七は、思はずも夜中、日光の町を見降して、

何んとも言へぬ景色をながめました。

勇七は手を振つてお母さんのお言葉は誠實である、幽霊といふものは決して有るものではない、あく病もの、目には、何時でも幽霊は見えるが、強い者には決して幽霊といふものはない、自分で始めて経験して幽霊のない事を知りました。

第六 かたわの獅子

政吉といふ子供と義一と云ふ小供と、學校へ行く道で、

義「政ちゃん、昨日電車に乗つて何處へ行つたの。」

義「君は僕が昨日何處かへ、行つたのを宜く知つて居るねへ。」

義「僕は君が、ニコ／＼して阿父さんと一緒に京橋から電車に乗つて居るのを見たよ。」

政「ウン、昨日は面白かつたよ、上野へ行つて獅子を引て来たよ、君はまだ見ないかい。」

政「まだ僕は見ない、書では見た事があるが、如何だ書とは違はないかい。」
政「行つて見たまい、體と云ふたら、君の阿父さんよりも大きいよ、顔といふたら、書に書いてある鬼の様な恐しい顔をして居るよ、おまけに眼の玉

と云つたら、水晶の様に、ピカリ／＼光つて居るよ、力と云たら、牛でも馬でも、人間でさへも、唯一打で殺してしまふよ、怒つた時には、雷様が五十も百も、一緒にガラ／＼ビシヤリ、と云ふ様に恐しい、ひどい響かするよ。』

義 『獅子は獸の内の王様と云ふから、ほんとうに、恐いだらう。』

政 『昨日獅子を見て来て、阿母に獅子といふ獸は、恐ろしい、恐い獸だと云ふて、話なすと、阿母のおつしやるには、この恐い、恐しい、獸でも思義を忘れずに、恩返しをする、良い性質があるといふて、面白い、長い獅子のお話を聞いたから、僕、君に其話をして聞かすから、よく聴き給へ。』

政 『昔し、昔し大昔し、千六百年も以前に、亞非利加といふ、熱い國に、大層な、お金持があつたとさ、此國では、人間を馬や、牛や、鳥の様に』

金を出して、市場で買つて来て。人間をも人間と思はずに、酷い獸の取扱をするさ、此お金持の家に一人の僕が居つたが、大變な働きの者で、骨惜みなんかは、少しも致ないで、朝から晩まで、一生懸命で、よく／＼働くの、御主人は大變無慈悲の奴で、少しの過をほじくり出して、罪もないのに、哀いさうに鞭で、ビシヤリ／＼とた／＼から、常に手や足に、生きづの、絶えた事は、なかつたさうだ。

夜になると、此僕は臥床の中で、獨で毎晩きづに膏藥をはりながら、ウンウンと泣いて居つたさ。

或る晩の事であつたが、何んだか、非常にふさいで居つたが、己れも斯様酷いめに、毎日／＼逢ふては、とても辛棒は出来ない、機をうか／＼つて家出をしやうと決心をいたしたさうだ。

次の夜、御主人も、仲間の者も皆んな、シオンと寝沈まつた時に、静か

に兩手を開けて逃げ出したさうだ、然し逃は逃たもの、懐に一錢の錢もなし、又誰といふて、便つて行く人もなかつたから、近所の真暗がりの森の内へ、逃げ込み、其所で其夜は、堅い石を枕として、恐わく寝たさうだ、風の音で朝早く眼を醒して見ると、向から、恐しい一疋の獅子がやつて来た。是は大變、漸やうの事で、辛い主人の家から出て安心だと、思ふ間もなく、又々この恐ろしい獅子に、出逢つたから、眞青になり、體はブルブルへ、戦ふに刃もなければ、鐵砲もなく、逃げるにはつかれて逃げる事も出来ず、穴にかくるるにも、近所に穴はなく、にづちも、さつちも、何する事も出来ず、進退これ谷まつたとは、此事で、唯だ死ぬるも、生くるも、神様におまかせ申す外、仕方がなかつたさうだ。

獅子がだん／＼と近よつて来るのを見ると、實に奇態だ噛みかゝる様子もなく、何んだか、イタイ／＼助けて呉れ／＼と云ふ風であつたから、よ

四〇

く／＼獅子を見ると、足を大變に傷けて、血を足から流しながら、ちんばを引いて、居つたとさう。

僕は恐わく獅子に、近よつて足を見ると、足に何んだか、大きな棘がさつて居たから、大きな獅子の足を、肩に乗せて、足にさつて居た刺を取つて、やつたとさう、すると獅子は有り難う、有り難う助かりましたと言はんばかりに、頭をさげ、犬の様に肩に足を掛けたり、又た大な舌で手や、足をベタ／＼となめたとさう。

此日から、獅子と僕とは大層仲のよい、朋友となつて、獅子は、毎日何處からか、食物を運んで来て、此の恩人を養つて居つたとさ、僕は茲で中入にしやう、斯様のべつに話すと、疲れてしもうよ。

義『君水でも飲んで、これから先を誰かやりやつて呉れ給へ、君は阿母の話をよく覺えたな、君は話し家の前座位には今でもなれるせ、これから扇

子でも持つて、もつとやり給へ。」

政「お話し變つて、家の方では、僕が夜逃げをした、といふので主人公は目の玉を怒らし、やかんあたまで、あつくして、其由を役所へとつけ出し、四方八方に手を廻して、探しましたが、如何しても、手がかりがありません、二三ヶ月後に、獵師の爲めに、捕まへられ、とうとう其主人公の家につれて歸られたそうだ。」

一體此國では金で買はれた僕が、主人の家から、遁げ出すと、其の刑罰は、荒い獸にさき殺させるんだそうだ、それで此の僕も國法によりて、逃げ出した、罰として、ある荒い獸に、噛み殺される事となつた。

さあ、今日は逃げ出した、僕が、荒い獸に噛み殺される日だと、云ふので町の人々は成人でも、子供でも我れ先きにと見物に出かけた。

僕は青い顔をして、土間の上に頭をさげて、涙をポツリポツリ流しながら、

悄れて、座つて居た、次の部屋ではウーウーと獅子の大聲が聞えた、見物人は其獅子が、非常な勢で、次の部屋から、飛び出て來のを見て、顔を青くする者もあつた、ブルブルと慄へて居つた者も居つた、大聲を出した者もあつた。

嗚呼、危機一髪、僕の生命は、瞬間に、なくなる所である、見物人は皆んな、堅睡をのんで、見て居つた、實に奇態なのは茲だ、獅子は僕のまじかに來ると、ウーウーといふ恐しい聲は止んだ、恐ろしい眼の光は、消えてしまつた、見ると、飼狗が主人にふざける様に、肩に手を掛たり、手や顔をベタリととなめたとき、この有様を見た、役人や、僕の主人は驚いたも、驚いたも、非常に驚いた、其上に、僕から自分が一度、山奥で獅子の足の筋を、ぬいてやつた、恩を忘れず、恩返しをしたのであると聞いた時は、非常に驚いたばかりでなく、誰れでも、皆んな、非常に感服し

うだ、残酷な主人も、其話を聴いて、非常に自分の、悪かつた事を悔い、僕の刑罰を、ゆるしてやり、家に連れ歸り、其れから其僕を大切に使つてやつたとさう。』

「いや忘れ入た、獅子の話を聴いて、感心だ、僕等もなんでも、神様や、阿父や、阿母や、朋友から受た恩義を恐れてはいけない、一生懸命に恩を返へさう、學校に行つて勉強しやう。」
と兩人づれで學校に行きました。

第七 なつと賣の小娘

九段坂の下で一人の十五六歳位になる、丈のすらりつとした、色の白い、丸顔で上品な愛さようのある小娘が、束髪で、及び茶の袴を少しく高くはき、足には靴を穿き、長いたもとを上を巻きあげ、手に平い桶をさげ、柔しい聲で、

「なつと、なつと」

と賣り歩いて居りました。

すると向ふからきた、せいの高い、立派な鬚のある中々品格のある大學の帽子をかぶつた青年がしきりに、其娘をながめて居りました。

小娘は其青年と通りすがり、恥かしそうに、下を向きながら、小聲で。

「なつと、なつと」

と再び賣聲をあげますと

青「なつと屋さん。」

小娘「はい有難う……いくらあげませう。」

青「僕は、なつとを買いだいたいではありませんが、少しあなたにお尋ねしたい事があります。」

小娘「何の御用で御座いますか。」

青「見受けますと、あなたはなつと賣をなさる様な身分でない様に思はれます、其には何か子細があたりなさる事と、思いましたから、何かお助けになれば致したいと思ふて、よび止めた理由で御坐います。』
と、如何にも質朴な、隠しのない、親切が自然と其風采が言葉にあらわれて、居りましたから、小娘は、

小娘「御親切様にあり難ふ御座います、御見受の通り私は三四日前から、なつと賣を始めました、新参者で御座います、私は熊本藩の士族の娘で、お父さんに小供の時に別れ、お母さん一手で育てあげられた者であります、昔はかなり公債証書もあつたそうでありましたが、日本では女と申すと兎角馬鹿にされ、色々にだまされて五六年前には何にもない様になりました。母は私をどうか一人前の女にしたいと、思ひなされて、人様の縫いものをしたり、洗濯ものをしたりして漸うの事に、私を小學校を卒業させ、今は

神田猿樂町の東京女子中學院で勉強いたして居りますが、一ヶ月前から御母様は、ひどいリョーマチスで洗濯どころではありません、針も動かす事も出来ませんから、月謝にはこまり、食事も出来なくなりましたから、止を得ず、學校から歸つて参りますと、直ぐ其足で、なつと賣に出るのであります。』

と涙のながるゝ眼を長いたもとでおさへながら、何かくしくしく物語りをいたしました。

静に聞いて居つた、青年は小供の時から、何に不自由なく育つた者と思へ、世の中には實に氣の毒な者があればあるものである、小説を讀んだりして涙を出した事はあるが、小娘から自から實話を聞いて泣いたのはこれが始めてありました。

青年「私も熊本藩の者であります、私にも妹があつて學校に參て居りま

す、若しや御さしつかへがなければ、私の家にお出でなさい、母も喜んで御世話を致します。」

小娘「有り難ふ存じます、私の様な者でも親切になさつて下さる御方がありまして、私の家にお出で〜と云ふて下さる朋友も、御座ります、又困るであらふと云て金銭を持つて来て下さる御方が御座りますが、今まで数年の間、母一手で私を育て、下さつたに、一ヶ月位母が病氣になつたらといふて、人様の御やくかいになつたり、又金銭をめぐんで戴きますは如何も、私は親に對して濟みません、學校も一二年内に卒業をいたしますし、又母の御病氣も、長くはありますまいから、私はどうしてもなつと賣をして獨立で親を養ひ學校を卒業したい決心であります。」

と述べ立てました。

十五六歳の小娘としては、非常に、氣高い獨立心がありました。

小娘は言葉をつげ

小娘「若し、御親切があるなれば、何卒なつとを買して下さい、五十錢の資本で一圓になります、一圓残らず買つて下されば直ぐ家に歸つて勉勵する事が出来ます。」と申しますと、

青年は生れてから、なつとと云ふものは嘗て見た事もなければ、食べた事もありませんから、何か甘いものと思つて

青年「それでは僕は一圓で買いますから、皆な下さい。」

小娘「それは有り難う御座います。」

と云つて、桶の内からなつとを出し

小娘「どうも有り難う〜〜」と禮を述べて家に歸りました。

青年は一圓の、なつとをさげて行きましたが、どうも〜鼻にプンと臭くつて仕方がありませんから、開けて見ますと腐つた様な味噌がありました、こん

な物を持つて家に歸つても、何の用にも立つまいと思ひ、何度か溝に捨て、しまはふとしましたが、まさか一圓も出して買ったものを、みす／＼無益に捨てしまふわけにも行きませんから、いやながら、家までさげて歸りました。すると十二歳になる妹は兄が何か家にさげて来るのを見て。

妹「おや、お兄さんお歸り、お土産を下さい、兄さん何を買つて来たの、

兄さん何だか、くさいよー。」

母も聲をそろへて、何だかくさいよーと云ふのを聞いて、青年は大へん閉口をしましたが、仕方がありませんから、一圓で買ったなつとを見せますと。

母も、妹も、下女のお竹までが半分馬鹿にひやかしました、然し青年から感心な、なつと賣の小娘の話を知りて、誰一人として、涙を流さなかつた者はありませんでした。

小娘は一二年降つても、てつても、なつと賣をして母さんを養ひ、とう／＼

學校を卒業いたす様になりました。

小供には獨立心といふものがなければいけません。人の世話になるよりはなつと賣をしても自分を支へた方が餘程貴いのです。

卒業式の當日は、多勢の立派な、美麗な衣服をきた、學生や、其親達は學校の講堂に一杯充ちました、卒業生は五十一人で、皆な十七八歳の立派なお嬢さん方でありました、衣服といふたら皆んな、ちりめんの紋付き、其内に手織の木綿ぎものをきて、はげたゑび茶の袴をはいて居つた、一人の娘がありました。

校長は卒業式の演説を終り卒業証書を渡さうとして、大聲で澤井常子と呼びますと、手織の木綿衣服をきた、はげたゑび茶の袴をはいた、なつと賣の小娘が、實に奇體です、五十歳位になる、きたない衣服をきた女の手を引ばつて、校長の前に進んで参り、自分は校長の前に立ち、其女は、其側の腰掛に坐らしました。

校長は此度卒業生五十一人の内第一番の大名譽を以て卒業した、卒業生は澤井常子であると云ふて、卒業證書と賞とを渡しますと、満堂の人々は皆な、手をたたいて、賞めました、すると其娘は側に坐つて居つた母を立てて申しすに、

小娘『私は自からこの卒業證書や、御賞を受くる値はありません、この私の母が涙の内に、神の御助により、私を育てて下さつたお影でかく名譽を以て卒業する事が出来ました。』

云ふて其卒業證書と、御ほうびをお母さんの手に渡しました、すると萬堂の人々は皆な拍手喝采を致し一時は雷の様な音がしました。其内常子萬歳、常子萬歳といふたものは一圓でなつとを買つた青年でありました。

第八 子供の世界一週

十三四才位の子供が四十人も隊を組んで、新橋の停車場に列んで居りますから、停車場の小使が其子供の一人に何かと聞いて見ますと、六ヶ月前日本橋の淺田といふ十三才になる子供が、獨りで支那から印度、亞弗利加、歐洲及び亞米利加に渡り、世界を一週して、東洋汽船會社の春洋丸で、今朝横濱に着し、十時の急行で新橋に歸るといふ電報があつたから、學校の朋友が出迎ひに來て居るのだと云ふ事がわかりました。

なる程十時の急行が着すると、一人の子供が『プラットホーム』に出て來ました、すると三四十人の子供が一同淺田君萬歳と叫んで安着を祝ひますと、其子供は帽子をぬいでニコ／＼と笑ひながら、大勢の子供に其れ其れあいさつを終り、出迎の朋友に連れられて家に歸りました。

日本橋區内で有志の子供等は、淺田の爲めに盛大な歡迎會を開かんと區内の一番廣大な講堂を借り受け、門には日の丸の國旗を交叉に立て、講堂の入口

にはほうづき提灯を鈴なりにぶらさげ、講壇の壁には大きな世界の地圖を懸け、講壇の兩側には花瓶に立派な花を飾り、其れ々委員を設けて、充分の用意も出来ました。

午後二時の開場でありましたのに早や一時に六百人もはいる講堂は一杯になりました、日本橋で斯く大勢の子供が一緒に集つたのはこれが初めてであります、小供といふものは何でも珍らしい話を聞く事が好ですから、世界を一週して来た浅田から面白い話を聞こうと思ふて、斯く大勢の子供が集つたのであります。

チン／＼と二時の鐘がなりますと、拍手喝采の内に壇に登つたのは、浅田君です、十三四才にしては大がらで、確に十六位に見えます、身丈は娉婷として顔は丸く、色は少し黒い方です、紺色の洋服をきて風采は中々落ち付いて居りました。

『諸君！ 昨日はわざ／＼御出迎ひにあづかり、又本日は斯の如き盛大な歡迎會に接するは私にとつて此上もない幸福であります、この壁に懸つて居る圖を御覧になれば、(棒で圖を指し乍ら) 私が世界を一週した道筋がよくわかります。

六ヶ月で數千里以上も旅行したのでありますから、云はゞ駆け足で世界を一週した様なもので、見たものはほんのわづかばかりであります、又この僅な時間でも詳しくお話し申す事は出来ませんから、ほんの略を御話し申しますから其つもりで御聽を願ひます。

横濱を出帆しまして第一に支那海で甚い暴風に出合ひまして、船は非常に動き始めましたから、人間でも荷物でも何でもあちらへゴロリこちらへゴロリと揺れ、高い煙突の上から波が入って火を燃く事が出来ないといふ始末で、船中のものは總辭で、汚いお話しですがグラ／＼と食べたものは皆吐き後ちに出る

ものがなから血まではきました、成る程昔から可愛い子には旅をさせよとはこの事だと思つて非常に感じました、ホンコンに着いて近所の景色を見ると、皆はげ頭で實に殺風景であり、川に小さな舟が百艘も千艘もありまして、其の小さな舟に夫婦親子四人暮しの者もあり、六七人も住んで居るものもありまして、夜になると其船に提灯をつけ、賣物屋は何でも舟で賣りに來ます、實に舟で町を造つて居るやうな有様です。

ホンコンを出で次にシンガポールに一日とまりましたから上陸しました、此町の家は皆どれもこれも青い色に塗つてありました、果物は「バインアップル」といふのが名物で口に入れると溶けてしまひ其は何ともいへぬ甘いものです、諸君涎をたらしてはいけません、——洪笑——

次にはセーロン島のコロンボに着きました、果物は何でもありません、暑い暑い日本の八月位の氣候です、汽車で六時間ばかりかゝつてお釋迦様の齒の

祠つてある宮に参りました、中々大きな齒です、あの齒ではお釋迦様も象の様な大きな口であつたと思はれます。

コロンボから舟を乗り替へまして印度のカルカッタに渡り、それから汽車で印度大陸を横りボンベイに参りました、印度人は食物をたべるに箸を用ひないで自然の箸の指で何でもたべます、指といふと汚いですが中々奇麗にたべます、蛇の多いには驚きました、日本の猿廻しの様に蛇つかひが居りまして蛇を踊らしたり、蛇で縛をしたり蛇を呑んだり色々なめづらしい藝をいたします、それから大きな象に乗りました、丁度日本の人力車の様に象で旅をいたしますが中々面白いものです。

ガンヂス川に二人の子供が老人の親を投げ込むのを見て甚い事と思ひました、案内者に聞いて見ると、ガンヂスに生ながら投げられると直ぐ極樂に行けると信じて居るから決して悲しい事はないと申しました。

ボンベイから再び舟に乗つて印度海を横り紅海に入つた時は非常に暑さを感じました、舟からアラビヤの砂漠を見、遙にサイナイ山を眺めました、又大風が吹いて砂を舟の甲板一面にかぶせるのには閉口いたしました。

スエズに着いてから直ぐ汽車でアフリカのカイロ府に行き有名な「ピラミツド」に登りました、ナイル川の水はほんとに甘い味がします、エジプト人は此水さへあれば酒は不要と云ひますが、實際そうかと思ひました。

アレキサンドリヤから船に乗り、實に青々とした地中海を斜に横ざり、フランスのマルセイユから汽車でパリに着きました、こゝはフランスの首府でありまして世界第一等の立派な市であります、世界の金満家の遊び場所でもあります。

それから歩いてスイツルの山廻りを始めました、アルプスにも登りましたがどうも絶景です、ゼチバ湖の舟に竿さしました。

ドイツの都ベルリンでは、其は何ともいへぬ上手な音楽隊の音楽をきき、ライオンを上つて世界第一の立派な川を見ました、オランダに行つて見ますと、成程オランダといふ國は海より底いからです、海岸に土手がこしらへてあつて、其土手の破れないやうに番人がついて居ります、どの家でも風車で水をあげて居りますから、日本で五月の鯉登の様に町中風車が高く聳へて居て立派です。

次にとうとうロンドンに着きました、商賣の盛大なものには實に目を眩したです、テムス川には世界中の船がついて居りまして毎日世界中に出帆いたしました、世界中で人民がいかに活潑です、二週間も居りましたが毎日朝から晩まで駆け歩く様に地下の鐵道に乗り込み、見物をしましたが中々十分の一も見ることが出来ませんでした、スコットランドのグラスゴーに行つて造船の盛なのは實に驚きました、町中が煙だらけなのですが抑も此の煙が町の花であるのであります。

グラスゴーから歐洲を後にして大西洋に乗り出しましたが七日目に米國のニューヨークに着きました此時も又々航海中二三日暴風に出逢ひ閉口しました支那海程ではありませんでした、米國合衆國程大きな國はありません、又富の無盡藏でどの位金山があるか何があるかわかりません、國が大きくて人民が其割合に少ないのですから一代に金持になる事が出来ます、ニューヨークの町だけでも何百萬圓を持つて居る金満家は百人も二百人も居り、ある所では百萬圓以上持つて居なければ住めない町があります、米國は金國で金を神様の様におがんで居ります、然し其内に其金を惜みなく、學校や書籍館や病院や貧民救助の爲めに年々何百萬となく寄附する人のあるには、驚きます、耶蘇教は非常に盛でありまして私がフヒラデルヒヤで或る日曜日にウオノメーカといふ人の支配して居る日曜學校に參つたら三千人以上も子供が集つて居りました、音楽隊が音楽をいたします、三千の子供が一同に歌をうたふ時は世界で見られないもので

ありました。

ナイヤガラナイヤガラの瀧は世界第一だけあつて、見ても恐ろしい様です、水の音が雷のやうにゴ〜〜となつて居ります。

モウ時が一時間も経ちまして諸君も退屈でありませうから、これから日本へ歸る迄駆け足に走ります、モウ直に日本につきますから、モウ暫く辛棒を願ひます、——(そろ〜歩き給へ退屈はせぬ)——ニューヨークからサンフランシスコ迄汽車で六日かかりました、六晩汽車で寝ましたが米國の汽車は立派です、金さへ出せば汽車の中に寢臺もあり、食堂もあり、散髪もあり、書籍室もあり、湯にも入る事が出来ます、六日も汽車に乗つて未だ同じ國を通つて居るので此國には終がないかと思はれました、サンフランシスコに着いた時はモウ日本に歸つた様な心持がしました、汁粉や蕎麥は食べられるし三味線の音も聞ける、夜チン〜と夜そばのおとも聞ける、其はその筈此近傍に一萬以上の日本人が

居るからであります、日本人も大分世界的になつて参りました、何處へ行つても日本人は居ります、わけて米國には多勢の日本人が居ります。

十七日かゝつてサンフランシスコからハワイを経て横濱に昨日無事に着いたしました、太平洋は名丈あつて、穩で船に酔ふ事もありませんでした、今日は先づこれにて」

と云ひて講壇を下らうとすと、講堂は破れる様な拍手喝采でありました。

第九 犬の博覽會

上野公園の犬の博覽會が東京をひつくりかへす様な大評判で子供が寄るとさわるゝと犬の事ばかり話し、どの犬が良いとかあの犬がゑらいとかと云ひ争ひ、結局は握拳をふりあげて喧嘩の多い事丸で東京の子供は皆な犬きちがひになつたといはれました。

仙太郎といふ十三四の子供が途中で慶次といふ十四五の子供に出逢ひ

仙「慶ちゃん、犬の博覽會を見に行つたか」

慶「上野公園の博覽會か」

仙「そうよ」

慶「中々犬が澤山居るな」

仙「君はどの犬が一番ゑらいと思ふか」

慶「そうだね、入口に繋がれてる大きな立派な白い犬だろう」

仙「慶ちゃん、ほんとに博覽會を見に行つたのか」

慶「行つたとも、二度も行つたよ」

仙「君は犬の首にさげて居るものを見たか」

慶「犬は何にもさげちゃ居なかつたよ」

仙「君はいつでも知らない事を知つた顔したり、見ないものを見た様な風を

するから、人から馬鹿にされるよ、人が皆な君の事を慶次といはないで馬鹿慶といつてゐるよ、君が博覽會を見ない證據には、入口に大きな立派な白い犬なんか居りやしないよ、此度の博覽會は、白いか赤いかか大きいとか小さいとか立派とか見苦いかいふ外部を見せる、通例ありふれの博覽會でなく、犬の内部の博覽會だよ、君もきつと見てき給へ、君もう物知り顔するのを止し給へ。』

慶「イヤ、僕も今日は君に一本見事にやられた、實はまだ博覽會を見ないのだよ、あんまり、誰れも彼れも、博覽會博覽會つてさわぐから、僕も行つて見て来たやうな顔をしたんだよ、僕はわるかつた、これから君の諫を聞かう、僕は犬の博覽會といふから、毛の艶のよい白いか赤いかか大きいとか小さいとかいふ犬を澤山連れて来て、見せるのだと思ふたのよ、そうでないのか、其は一本參る筈だよ、今日早々これから見に行かう、然

し君の云ふた犬の内部の博覽會といふのは何だか僕にはわからない、僕はもう物知り顔はしないよ、知らん事は知らんといふよ、今日から心を改めて謙遜になるよ、君教へてくれ給へ、僕が今までの物知り顔だつたならば、内部と云ふから、犬の胃の腑や、腸や、肺や、腎臓の博覽會だろと云ふけれども物知り顔はしないよ、知らざるを是れ知らずとせよ」だ、犬の内部の博覽會とは何の事だい。』

仙「君がそう急に謙遜になられると、僕もいたみ入るよ、何も僕が云はずとも行つて見たまへ、すぐわかるよ、犬は皆首に勳章をさげて居るよ、丁度日清の戦争に大功のあつた人が、金鷄勳章を貰つた様に、非常な功があつた犬が首に金鷄勳章をさげて居るよ、見て來給へ、君も感心するよ、眞に内部の博覽會だよ、今日行くなら明日君と逢つて、どれが一番ゑらい犬か意見を戦かはして見よう、君やくどの犬が一番ゑらいか見て來給へ、あす

は必ず僕は君の家に行くよ、僕は少し急ぐからサヨナラ』
と互に別れて、慶次は早々電車で上野公園に行つて大評判の犬の博覧會を見ました。

成程行つて見ると思ふた事とは丸きりちがひ、犬の数は五十疋ばかり、三月の御雛様の壇のやうな壇に皆な首に勳章をさげて並んで座つて居りました、其犬のすわつて居る臺の下に活版ずりにして其犬の勳章を貰つた譯がはりつけてあります、其内には狗のやうな小さな犬もあれば、大きな犬も居りました、犬に皆な名があります、六かしい外國の名で中々皆な覚えさる事は出来ません、一番下の段の真中ごろに座つて居つた犬は、ニウ、フワンドランド産の犬で、大變大きなすらりとした顔の長い小馬のやうな犬でありました、此犬の勳章をもらつた理由は、或時一疋の荒れ馬が道行の多い町を、無闇に荒れ廻りて居りましたが、誰一人手をつけるものもなく、又つける事も出来ませんでした、と

ころが横町から此犬が出て来て、三四度荒れ馬の手綱に飛び付いて止めやうとしましたが皆な失敗いたしました、然し遂に五度目には既に馬に踏み殺される處をあぶない事に辛うじてくい止めた犬です。

中段の右の端に座つて居る犬はカローと申す犬で、これもなか／＼大きいですが前の犬程大きくはありません、毛の色は赤と黒と白とのまだらの犬で、非常に立派な如何にもゆつたりした犬でありました。米國の或る町で大火事のありました節、火の手が早くて見る間に火が四方へ廣がりました、人が不意を打たれた様子で、何をするとも出来ませんでした、一軒の家の二階で大變にあかんぼの泣き聲が聞えますから、火消夫が梯をかけて登つて行きまされたけれども、煙にまかれて残念にも降りて來ました、するとこの犬が梯子に登つて行きましたが、窓に入らうとして煙にのまれて降りやうとしました、すると下から犬の主人も又多勢の人もけしを懸けて子供をつれて來いと云ふて大變に勵ましました。

だから、再び大膽に煙を潜つて窓の内に入りましたが、暫く経つても出て來ま
せんから、下では子供も犬もモ一死んだと思ふて悲しんで居りますと、犬はキ
ヤツ／＼と泣く赤子をしつかりと口でくわへて、まつ黒けな煙の中から顯はれ
て參りました、下に居る人は呼吸をのんで早く下りろと申しますと、其犬は見
事に赤子を落しもせず高い二階から梯子をつたつて、下に降りて參りまして無
事に其赤子は救はれました。

然しかわいそうに自分は氣絶して死んだ様になりましたが、醫者の手當で、
漸のことで蘇生たのであります、大勳章を首に下げて居りました。

一番上の段に狗のやうな、身體中長い毛の生へて居る小さな犬が雛様の様に
行儀よく座つて目をキヨロ／＼として居りました、西印度で、一艘の般が非常
な荒に出逢つて、暗礁につきあげ、般は粉々になる所です、海岸は近く、人は
多勢出て助けたいと思ひましたが、助け舟もなく、又この荒れては如何する事

も出來ないといふて、ボンヤリして立つて居りました。

すると般長は此犬の首に細い紐をく／＼りつけて、荒れにあれば居る海中に投
げ込みました、で犬は大波に打たれて死んだかと思ひましたが、頭を其波の中
から出しながら波にそつて見事に岸まで泳ぎつきました、岸では其犬の首に綱
のついて居るのを見て、其綱を手繰り初めました、船の方では其の細い綱の端
に大きな舟綱をく／＼りつけましたから、だん／＼手繰られて、其大綱は岸に達
しました其綱が生命のつなで、船長初め水夫は皆な其綱を梁として、大荒れの
中に、其綱によつて生命もやう／＼の事に助かりました、此の犬は小さな癖に
大きな勳章を首にさげて居るのは最もであります、小さいといふてなかなか馬
鹿には出來ません。

下の段の右の端に座つて居る犬は、これもニウ、ファウドランド産の犬で、
毛は短く、大變に毛に艶のある犬です、名はセント、バルナルドと申します、

スウイツランドの山中には冬口になると、旅人が度々雪の爲めに、難澁をし、降り積る雪の下になつて死すものが随分多勢ありますから、耶蘇教の教師が山中に小屋を建て、犬を二三疋飼つて居つて、雪あらしがあると直ぐ犬を助けに送ります、すると犬は雪の中を潜りくつて、鼻で人の居る所を嗅ぎ出して、凍へて死なんとして居る旅人を助けて小屋につれ歸ります、この犬は今日まで五十人も人の生命を救つたのであります。

この外に何疋も實に感心な利口な犬が勳章をさげて居りましたが、残らずは一度見に来た許りではとても皆な知る事は出来ません、少なくとも五度や六度は来て見なくては駄目です。

次の日仙太郎は約束通り慶次の家にやつて来て、いきなり

仙「慶ちゃんドーダ、犬の内部の博覽會といふのはわかつたか」

慶「いや恐れ入つた、わかつた〜、然し内部といふよりは、犬の精神とか

品格とか或は品性の博覽會といふ方が適當かも知らん、で僕は外部の博覽會を見るよりはよ程面白い、子供には、非常な教育だ、僕は非常に教へられた」

仙「君はどの犬が、一番ゑらいと思ふか、

慶「イヤ、一度位ゐいつて見たんでは、まだどの犬が一番ゑらいといふ事の判断はわからない、モ一三度見た上にしやう」

仙「君は大分に謙遜になつたチ、僕は喜ぶよ、物知り顔は眞にいけない」

慶「イヤ、僕は大に悟つた、今迄は實にわるかつた、人が僕を馬鹿慶といふたのは最もである、僕は自分で耻かしく思ふ」

精神的犬の博覽會は唯獨り慶次に感化を與へたばかりでなく、數千人の子供は教育上精神上非常な益を得ました。

第一〇 按摩上下三百文

牛込南町の通りを夜の八時頃、十二月の寒い雪のチラ／＼と降る夜、按摩が
ピー／＼と笛を吹きながら按摩上下三百文と、しきりに悲しい聲を出して流し
て歩いて居りました。

すると大きな門がまへの奥の部屋で、年の頃十七八と見える、非常にけだか
い、立派な、お嬢さんが、机に向つて、わざ見もせずに、しきりに書物を讀ん
で居りましたが、悲しい按摩の聲を聞いて、側に座つて居つた、お母さんに
向ひ、

娘「おつかさん、今かどを、流して歩いて居る按摩をよんで、もましておや
りなさつては、如何ですか」

母「おまい何だへ、按摩にもんでほしければ、外を流してあるく按摩を呼ば

なくとも、御出入の按摩をよんだ方がよいでないか、こののかまへで、
外按摩などを呼び入れるのは外分かわるいでないか」

娘「如何にも御最もで御座りますが、この寒い夜、ピー／＼と笛をならして
も、よぶ人がないのは、氣の前ではありませんか、今私か讀んで居ります
書物に、彼の有名な詩人の、香川景樹さんが京都で非常に貧乏せられた時
晝は書を読み、夜は按摩をして、其窮をさへておいでになつた時の歌が
出て居ります、お母さん一寸御聞き遊ばせ

ゆふべ／＼しらべあやしく吹く笛の

あなあはれとも聞く人のなき

おつかさん、さぞあの按摩も香川さんと同感であると思ひます。」

母は娘の情深い心に感心して按摩を呼び入れました。

見ると十三四の小供でありましたので、母も娘も少しは驚いた有様でした、

母は按摩に向ひ

母「こちらへおいで、下の方はいらぬから上だけでよい、そして長くなくてよいからあつさりもんでおくれ。」

按「はい有難御座ります」

と禮を述べ、一生懸命、寒い夜であるのに、汗を流してしきりとたゞいたり、なせたり、もんだりして居りました。

母「おまゝは目が見えなくて、道を歩くに困るだらうな」

按「はい、道のあるくに困る事が澤山御座りますが、其内非常にこまる二三を申しますれば、一は此頃のやうに水道だとか何とかいふて道をあらされるには閉口です、次は悪い犬が二疋も三疋も一處にワン／＼と吠える時は泣きたくあります、又いたづらの子供衆に、前に石があるとか溝があるとかといふ、てだまされる時は非常に悔しう御座ります。」

母「おまゝい幾歳かエー、いつから盲人になつたのかエー」

按「我は今廿かぞへ年の十四才です、五つの中から盲目になりました。」

母「目醫者に診察してもらつた事があるかエー」

按「つい二三ヶ月前、御得意の御客様が御親切に東京大學の病院につれていつてえらい御醫者様に見せて下されましたが、もう五年も前に、療治をすれば癒つたが今は手後れで駄目だと云はれました」

母「両親はあるかエー」

按「母だけであります、恥しい話でありますが父は二三年前狂人になつて、井戸に身を投げて死んでしまいました」

母「それはかわいそな事、どうして狂人になつたのかエー」

按「はい、私の父は野州下羽田村では畑の何町もあつた、たいした百姓でありました、が、洪水毎に土手がさかれまして、渡良瀬川から流れこむ水は非常

な鑛毒があるものですから、はたけは皆役に立たぬやうになつたのを氣にして、身を井戸に投げて死にました、私の目のわるくなつたのも鑛毒の爲めだと申します、何しろ私の村では百人のものは、七十人迄は、皆眼病であります、鑛毒の爲め先祖代々もつて居つた地面は無益となり、親は狂人になつて井戸に身を投げ、私は盲目となりました、土地に居つても仕方ありませんから、昨年東京に参りまして、母は水引よるのを内職にいたし、私は按摩をし、二人でひどい暮しをして居ります、然し私も按摩で一生活も暮すつもりではありませんが、何分目の見えないのには困ります、私は三つ位の時から小刀を以ては彫ものをしたり、土で色々の人形を作つて居りましたから目が見えないと云ても一番楽しいのは彫刻をしたり像を造つたりするのであります、母からは貧乏だのにそんな事をして何の役に立つと云つて、毎日のやうに叱り付けられますけれども彫刻したり土で色々

の像を造るのが何より愉快でたまりません、私もどうかして彫刻師になりたいですけれども、よい先生について學ぶに金もなければ、彫刻師に大切な目もありませんから駄目です、然し肉の目は見えませんが有難い事には二三年前から神様に心の目はあけていたときましたから、いくら苦しい目にあつても少しもぐちをこぼす事はありません』

と話す談しを、娘は側に居つて、だまつて涙を流しながら聞いて居りましたが、娘「按摩さん目が見えなくとも失望しなくともよいです、神様はお前に心の目をあけて下さつたばかりでなく、二つの目のかわりに、十の目を下さつたから、其十の目をよく用ひさへすれば必ず彫刻師になれます、神様は詩人には詩の才、音楽師には音楽の才、畫家には畫の才を與へなされたが、其は生れながらの才でいくら勉強しても詩人の才のないものは詩人にはなれませんが、然し盲人でも彫刻の才があれば彫刻師になれます、フランスに

ピタルと云ふ彫刻師があつたが御前の様に、子供の時に目を失ひましたが、十の目を用ひて、えらい彫刻師になつた事があります、おまいの何より好きな彫刻を誰がなんと云ふがやつてごらん、神様はさつとお前を助けて彫刻師にして下さるよ、失望は失敗の基である』。

と如何にも得難い教訓を今宵お嬢さんからもらひ、十本の指と十を目として日本第一の彫刻師になるの大決心をいたしました。

助七は、毎日／＼按摩にも、ろくに行かずに、土ばかりひねつて馬だとか獅子だとかいふ様なものばかりこしらへて居りますから、母は大變に怒りつけ、『そんな人形を作つてどうするか、さ、按摩に行つて金を取つてこい』と、晝の三時頃、厭だといふのに無理に按摩に出しました。

助七は牛込の二十騎町をビ／＼と笛をならしながら、按摩上下三百文といふて、いつもの通り流して歩いて居りまゝと、白い前懸を胸から一杯かけた四十

位な男が

「オイ、助七大變今日は早いネー、丁度幸だ、今夜は御客で大變に忙がしくもあり、又四五日前から其用意で大變に疲れて居るから一寸こゝで今やつてくれ」

と云ふて臺所の板の間に腰懸けて按摩をやらして居りますと、奥から二三人の男と女が顔を青くしてやつて来て、

下男「親方、大變な事が起りました、垂洋燈が落ちて、テーブルの真中に飾つてあつた五重の塔のお菓子がメチャ／＼に破壊れてしまいました、どうも困つた事が起りました、今電話で風月堂に何か其代りになる菓子があるかと思ふて聞き合せましたが無事ありません、どうしたら宜う御座りませう」

親方「其は大變、按摩處ではない、一ヶ月もかゝつてこの夜こそ己の腕前を見

せてやらうと思つてこしらへたお菓子がメチャ／＼か、まゝならん世の中
 だな、詮方がない何か其菓子の代に作つてテーブルの真中に置かすばなる
 まい、困つた事ができたねー」

としきりと頭をかたむけ考へて居りますと、按摩の助七は、

助「旦那、其代りになるものを私に造らして下さいませ」

親「馬鹿をいへ、貴様に出来るものか」

助「お菓子の代りに其場所にバタで獅子を造つて置いたら如何です」

親「これはよい考だが其獅子ができるか」

助「バタがありますか、あるならこゝへ板一枚とバタを澤山もつてきて御
 れなさい」

といふて板とバタの來たのを手にして、親方を始め下女下男の立つて見て居る
 前で實に驚きました、立派な、生きたやうな獅子を造りました、親方は、其を見て

非常に感心し五圓札を一枚出してやりました。

助七は五圓札を手にして急いで家に歸りますと母は、

母「助七御前は今出て行つたばかりではないか、又一文もとらずに歸つてき

たのだな、お前には實に困ります、もう少し按摩に精出してくれ」

助「御母さん、私は今日から按摩屋は止めて彫刻師になります。」

母「又そんな馬鹿な事をいひます、目が見えずにどうして彫刻師になれます、
 御前の造つた人形はビダ錢一文にもならないではありませんか、彫刻師にな
 るならお前の造つた人形をいくらにでも賣つておいで、其が金になるなら
 按摩屋をよしてよい、お前が働かなくてお母さんが元結位よつて如何して
 お前を養ふ事が出来ます」

助「お母さんこれ御覽なさい」

母「これは五圓札である、お前はどうしてこの五圓を得ました」

と如何にも不思議そうに尋ねますと、バタで獅子を作つた禮としてもらつたといふ事を申しましたから母も始めてこの子供に彫刻師の才がある事を悟りました、天長節の宴會に招かれた人々は誰一人として、テーブルの中央にかざつてあつた獅子を見て感服せないものはありませんでした、其客人の内に日本第一の彫刻師廣田博士が居りまして、この作者は十三四才になる盲人であると云ふ事をきいて非常に驚きました。

廣田博士は明朝早く牛込甲良町十番地田中助七の宅に参り、母に助七が彫刻の才のある事を話し、母には月に七圓の仕送を約束して助七を自分の弟子にいたし、馬車に乗せて南町の宅に歸りました。

助七が連れ歸られた家は去年十二月の雪のチラ／＼ふる寒い夜、お嬢さんの勸により日本第一の彫刻師にならうと大決心をした家でありました。助七が遂に盲人ながらえらい彫刻師になつたのはお嬢さんの力にあります。

第十一 十二人の養子

八王子在の豪農とまでは云へませんが、田畑の十町歩をもつて居る、可なり教育のある、立派な農家がありました、此家に秀太郎と申す今年取つて十三歳になる非常な天才のある子供がありました。村中のもは此子供を神童と字名しておりました、小学校を卒業する時は優等で卒業いたしました、今年、愈々東京に行つて早稻田中學に入學が出来ると思ふて非常に楽しんで待つて居りました。

八月の極暑い日でありました、五人の朋友と連れ立つて思川に泳ぎに参りましたが、其五人の内一番弱い太郎と云ふ子供が向の岸に泳ぎ行かうとして、急流の爲めに下に流され、水を飲んでアブアブして居りましたから、秀太郎はよくも泳げませんでした、友達の死ぬのを見のがしにするわけにはいきませ

んから、自分も幾分か險のんとは知りながら、助けに飛び込みました、すると見る間に流されました、然し太郎を助けやうといふ熱心が満ちて居りましたから、太郎だけはやうくの事に助けましたが、自分は非常に水を飲んで死人同様にになりました。

其事が村の人々に知れますと、秀太郎の両親はいふに及ばず、村中の人々が駆け付けて参り、百方手を盡くして、秀太郎を倒にして水を吐かしたり、火を燃いて身體を温めたりして、出来る丈けの方法を以て助けやうと致しましたが人間の生命は人の支配するとの出来ないものと見え、神童といはるゝ秀太郎を亡くなし、村中が唯一人の子供の爲めに火が消えた様になりました。

両親は天にも地にも唯た一人の秀太郎を失ないました日から、家庭は暗黒となり、両親の目から涙の絶えた事はなく、何につけかにつけ思ひ出すものは秀太郎です、寝て夢みるものは秀太郎です、鏡の前に立つて自分の顔を寫そうと

すれば其鏡にうつるものは秀太郎の顔です、秀太郎々と云ふて一年も心淋しく暮して居りましたが、秀太郎の両親は早や五十以上で、自分で再び子供をもつ望はありませんから二人相談の上、秀太郎の代に、養子をとる事に決いたしました。

東京麹町に博愛家庭と申して、哀な親なしの子供を十二三人も自分の家で自分の子供の様に世話をする家がありますから両親は早々其主人に手紙を送つて、若しよい子供がありますなら八月一ヶ月試に二人の子供を世話をしてみたい、若し其子供が気に入れば其一人を養子にいたしたいとの望をいひ送りしました、主人は財政上非常に困難をして自分の家の子供をどうしたらよいか其處置に對して考へもし、祈りもし、朋友とも相談をして其方法を搜して居つた最中でありましたから、一二人と書いてあつた手紙を早合點に十二人と讀みましたから、主人は喜んだも喜ばないものか、十二人の子供によくいひきかし、

汽車に乗せて家中の十二人の子供を残らず八王子在に送つてやりました。

秀太郎の両親は東京からよくも揃うて十二三歳位の子供が十二人もやつて来たのに驚きました、見ると皆なが可愛い顔をして居りますから、二人より家に置く事かできないから、あとの十人は東京にお歸りと云ふ事も出来ず、さりとて一ヶ月でも十二人の子供を養ふには中々の物入りでありますから、夫婦二人は首を傾けて相談をいたしました、どうもよい考もつきません、十人の子供を返そうとすれば如何にも氣の毒でたまりません、置こうとすれば懐がいたみます、然し大決断をして何は兎もあれ八月一ヶ月は十二人の子供を自分の家に置く様にいたしました。

十二人の子供は東京に居るとはちが馬が廣場に放された様に氣が何となく延びた様であります、食物は畑から取り立てのものがだべられるし、空氣はよし、運動は思ひ存分できるし、十二人の子供は誰も東京に歸るのは厭になりま

した。其上十二人の内一番よい子供が一人この家の養子になれると云ふ事を知いて居りますから十二人の子供は落第してはたまらないと思ひ、子供ながらも非常に、行に注意し、朝は早く起き、晝は思ひ／＼に野に出て働き、夜は一生懸命に勉強し、十二人の子供が居て喧嘩一つした事はなく、仲善く八月一ヶ月も無事に暮しました。

九月の一日になりましたから、夫婦二人は十二人の内どの子供を秀太郎の代りに養子にしやうかと大切な相談を始めました、一時間も二時間も相談をいたしやすけれども、なか／＼まとまりません、夫は妻に向ひ、

夫『いくら相談をしても中々まとまりがつかないから十二人の子供を一人々々に意見を云ひやい、一人づゝ刎ねのけて一番後に残つたのを養子にする事にしやう』

とそれだけは相談一致して一人々々に意見を付する事になりました。

夫 「政吉はどうだ。」

婦 「政吉は聲がどこか秀太郎に似て居る所があつて、政吉の聲を聞くと秀太郎の聲を聞く様で、何だかなつかしいです。」

夫 「己もそう云はうとして居つた。」

婦 「正太郎はどうですか。」

夫 「正太郎は中々思ひやりのあつて居る處は秀太郎生寫しだ。」

婦 「そうとも、正太郎は思ひやりのあつて子供ですよ。」

夫 「信吉はどう思ふか。」

婦 「あの子の目のぱちりして居る處は秀太郎の目をまるであの子に入目した様で、中々愛嬌のある目ですよ。」

夫 「ウンそうだな。」

婦 「常太郎はどう思ひなさいますか。」

夫 「彼奴はなか／＼骨がある、秀太郎の氣象によく似て居るよ。」

婦 「そうですか常太郎は偉いものですよ。」

夫 「竹太郎はどうだ。」

婦 「竹ですか、身丈のすらりとして襟筋の處が秀太郎その儘よ、ホ、ホ、ホ。」

夫 「そうだね、よく似て居るな。」

婦 「勇之助はどうですか。」

夫 「彼奴は學問のたちがよい、十二人の内一番だろ。」

婦 「そうですかね。」

夫 「富吉はどうだ。」

婦 「富ですか、あなたあの子の歩き振をよく御覽なされたか、前足に力を入れて歩く處は秀太郎にそのまゝですよ、よくまあ似たものですね。」

夫 「奇態だね。」

婦「忠雄はどうですか。」

夫「彼奴は子供に似合はぬ宗教家だ、聞いて居ると秀太郎の祈丸寫しである、後にはたいした宗教家になるよ。」

婦「そうです、いつも私等の爲めに泣いて祈つて居りますよ。」

夫「次郎はどうだ。」

婦「次郎は鼻筋は通つて眉毛の濃い具合は秀太郎の生き顔の様でどつか、氣高い處があります。」

夫「あの子は何でも家柄の子だよ。」

婦「甚藏はどうですか。」

夫「あいつは勉強家だよ、一番朝早く起きて己等のまだ寝て居る内に獨で雨戸を開けるよ、秀太郎の後継ぎになれるよ。」

婦「そうともく、あの子には秀太郎の様に骨措しみをする事はありません

よ。」

夫「長七はどうか。」

婦「頭の恰好といひ毛の墨の様に黒くて笑ふと唇の深く入る處は秀太郎の顔を見るやうですよ、嬉しい事ねへ。」

夫「彼奴は笑ふと中々よい唇があるな。」

婦「誠一はどうです。」

夫「あいつか、正直だな、いくら金を貰つても馬鹿つかひする氣遣ひはないで。」

婦「ほんとにあの子は秀太郎のやうに正直です。」

と十二人の内誰れ一人として秀太郎に似ない子供はありませんでしたから、とらく十二人は残らず秀太郎の代りに養子としてしまひました。

第十二 紙屑拾ひ

九二

東京の芝新網と言へば誰でも知つて居る通り、貧乏人の澤山集つて居る所であります、行つて見ると三疊敷の様な小さな部屋に三人も五人も頭を並べて寝て居ります。其れは〱目も當てられぬ様な有様であります。

然し此の町に住んで居る者は、皆貧乏人には違ひありませんか、其の内には中々氣高い立派な感心な者も居ります。

中田と云ふ七十位の老人は忠一と云ふ十四五才かと思はれる子供と、三疊敷の小さな部屋に日々の煙をたて、居りますが、忠一は中々の偉者で、毎日大きな籠を脊負ふて紙屑拾ひに出て、漸々の事老人を養ふて居ります。

此の忠一は紙屑拾ひではあるけれ共立派な精神を持つて居りました。小學校は卒業致しましたから、何うかして中學校に行きたいと思ひ、毎日拾ふ紙屑の

中に英語の書いてある紙切や、新聞でもあれば、其れを御生大事にして拾ひ上げ、家に歸つて来て、部屋の壁に貼り付けて、夜遅く迄英語の獨學をして居りました。

或る日新聞の廣告を見ると、白金中學院と云ふ學校の生徒募集が出て居りました、能く讀んで見ますと、英語の選抜試験に及第した者は、毎月十圓宛の奨勵金があると有りました。

忠一は其の廣告を見て、非常に悦びました。何うかして其の奨勵金を得て、中學校に入りたいと思ひ、寝ても起きても其の事ばかり思ふて居りました。

四月八日の午前十時に白金中學院に参りますと、二百人許の學生が試験を受けに来て居りました。

忠一は其の多勢の學生を見て非常に氣を落しました、たつた二つの奨勵金を得る爲めに二百人とはこれは驚いた。兎ても僕の様な獨學で英語を學んだ者に

九三

は駄目だと思ひました。

然し神の助かあれば僕でも及第するかも知れぬと氣を持ち直し、大膽にも其の二百人の内に加はり、英語の試験を受けました。

中學院の校長は二百人も集つて居る學生を廣い講堂に集め各々机につかせ、一枚の英語の紙を與え、三十分間に其の問題を譯する事を命じました。

二百人の學生は其の試験紙を見て失望した者は百七八十人ありました。これは兎ても駄目だと思ひ退出しました。實に残つた者は僅か二三十人より有りませんでした。が、三十分間に美事其の英語を譯した者は忠一一人でありました。校長は忠一の技倆を見、たゞに驚いたばかりでなく、忠一は獨學で其の英語を學んだと云ふ事を聞いて尙々驚きました。

勿論二百人の内に第一に及第して毎月十圓の奨勵金を貰つた者は忠一でありました。忠一は鬼の首でも取つた様な勢で家に歸つて見ると、老人は三四日

前から風を引いたが元となつて、肺に非常な故障を起し、今にも息を引きとらんとする處でありました。

忠一は驚いて其の老人の耳に口を當て「お父さん〜！ お喜び下さい、奨勵金が取れました。」と云ひますと老人は苦しい内にニコ〜と笑ひ、

「あゝ、そうであつたか今迄祈りづめに祈つて居つたのである。其れは何よりの事でありませぬ、私も其れを聞いて何も思ひ遺す事はない、然し今息を引きとる前に、云ひたい事は、外ではありませぬが、今迄貴方は私を親と思ふてお居でになつたが何を隠しませう、私は貴方のお父様の家來の忠藏と申す者であります。

貴方のお父様は立派なお家の息子様でありましたが、其の主人の爲めに御兩親は身を捨てなくてはならぬ場合となり、哀れにも御兩親は、お亡なりになつたのであります。

其の時私を呼び何うか此の子供を頼むとて、私ごとき者にお托しなされたのか貴方でありませぬ。

九六

私も貴方様をお預り申した時は、少しの貯金も御座りましたか、道樂息子の爲めに皆摩り上げられ、其の上出家出をされて、遂に此の様な貧乏人に墜つてしまつたのであります。

今日迄貴方は私を眞の親と思ひ、私を助けて下さつた御恩は決して忘れませぬ。私はイエス様の御手にすがつて天國に参ります。何うか勉強して立派な者になつて、亡なられたお父さんの後を繼いで下さい、これが最後の別であります、其れにつけても、私の子供は何處に、何をして居りますか」と云ふて、後は涙ばかりでありました。

門口に其の物語を一部始終聞いて居つた者は、不思議にも、此の老人の家出をした息子でありました。

老人も最後に自分の子供に遇ふ事か出来喜んで眠りにつきました。

第十三 鶴の一聲

正月の元日の朝十前頃、福松と云ふ子供が、四五人の友人と共に、面白そうに目白臺で凧を飛ばして居りますと、正作と云ふ十六七歳になる青年が、大きな牡丹餅のやうな紋のついて居る黒木綿の羽織に、小倉のちよん／＼の袴をはき、縄のやうな白い太い羽織の紐をぶらさげ頭には東京中學の帽子を少し横に戴き、手に薪のやうな棒杖を提げ、コロン／＼と杉の大きな下駄を引きづりながら、福松の側に来て

正「あい福ちゃん、今日は大分元氣だな、お雑煮をいくつ食つた、十五位食つたらう、頬が落ちるやうにふくれてら、餅の功能はたいしたもんだ、君風揚げをよして、僕と一緒に上野の公園に遊びに行き給へ」

福 「元日から上野公園に何しに行くんだ、上野のやうな遠いところに行かなくともこゝで遊んで居つた方がよいでないか」

正 「今日は正月の元日だから上野動物園に行つて目出度い鶴を見るんだ、君一緒に來給へ」

福 「僕は今朝もう鶴を見たよ」

正 「馬鹿を云ふな、この近所に鶴が居るものか」

福 「だつて見たものは見たよ」

正 「其は白鷺だろ、鶴と白鷺とは違ふよ」

福 「君こそ馬鹿をいふて居るよ、鶴と白鷺の違い位は僕でも知つて居るよ」

正 「君見たなら、鶴といふ鳥はどんな鳥か話して見給へ」

福 「足は君のようにヒョロ／＼長かつた、頸も轆轤頸のやうに長かつた、實によく君に似て居つた、口も君のやうに尖つて居つたよ」

正 「君元日から人を馬鹿にして居る、失敬だな」

福 「だつて正直に云ふのだよ、唯違て居つた所は君のやうに黒い顔はして居らなかつた、色は眞白で僕のやうな顔をして居つた、頭の頂きと翼が少し赤かつたよ」

正 「ウン、其はほんとの鶴だ、其鶴を何處で見たのだ」

福 「今朝早く家内中のものが一緒に奥の座敷で、お膳を並べて雑煮を祝つて居ると、庭の方で何んだかザワ／＼と音がするから、僕がヤと云ふた拍子に手に持つて居る碗を落した、其れで元日早々お母さんに一本參られたのだ、これが新年の叱られ初め、又失敗の初めさ」

正 「鶴はどうしたのかエ」

福 「するとさ、庭の方で鶴の聲かクウ／＼と聞えた、でお父さんもお母さんもこれは目出度いと云ふて非常に喜んだよ、僕の叱られたのもそれで

帳消しよー」

正 「それは喜ぶ筈だよ、鶴といふ鳥は日本では目出度い鳥だよ、何でも目出度い時には鶴龜と云ふではないか、御維新前までは、武士が過つて鶴を殺しても腹を切つて云い譯に死なねばならなかつた位に鶴といふ鳥は尊まれて居つたよ、誰でも鶴を殺すのは嚴禁であつた、羅馬の人は鶴を敬神鳥と云ふて居る、英語で鶴といふ意味は慈悲深いといふ意味である、其だから正月元旦に雑煮でもたべ、目出度く祝つて居る時に鶴の一聲を聞いては嬉しかつたであらうよ、中々金をいくら出しても、鶴の聲を聞こうと思つても、兎ても聞く事は出来ないよ、僕は上野まで元日早々鶴を見に行くのも、芽出度い鳥だからであるよ、君はよい事をした其ではもう僕と一緒に上野へ行くには及ばないよ、鶴を見た許りではなく、聲まで聞いたんだものよー」

福 「君聞さ給へ唯だ鶴の聲を聞いた許りではないよ」

正 「そらかい、鶴はどうかしたか」

福 「鶴が僕等の居る座敷の椽側まで飛んで来たよー」

正 「ウン、そらか、其は猶目出度い、鶴は一羽だつたかー」

福 「君奇態だつたよー」

正 「何がさー」

福 「僕も驚いたね」

正 「何がさー」

福 「珍らしい事があればあるものだよー」

正 「何がさー」

福 「いやいや鳥でも馬鹿には決してできないよー」

正 「何がさー」

福 「人間は萬物の長だと云ふが僕等は鳥に劣るよ」

正 「何がさー」

福 「なる程羅馬人は鶴を敬神鳥と云ふ筈であるよー」

正 「何がさー」

福 「英語で鶴を慈悲深と名をつけた筈だよー」

正 「何がさー」

福 「日本で過つて鶴を殺しても切腹を仰せつけられる筈だよ」

正 「君、僕が先程云ふた事を皆繰り返して居るではないか、いゝ加減に人は氣をもまさないで見たとをいふてしまひ給へ、君があんまり云はないと僕は猶聞きたいよ、鶴がどうしたんだ直ぐに云ひ給へ」

福 「鶴は一羽さたのではないよ、親子連で来たのだよー」

正 「ウンそうか、鶴が親子できたか、どうして君鶴が親子だと云ふ事がわか

つた」

福 「僕も始の内は親子だと云ふ事は解らなかつたけれど飛んでいつた後に確かに親子だと云ふ事を知つたよー」

正 「君それがどうして解つたよー」

福 「鶴が椽側に飛んできた時に一羽のやうに見えたが、降りて見ると二羽さー、一羽の鶴は大變元氣であつたが、一羽の鶴は病氣のやうで元氣がなく、たしかに其の病氣らしく見えた鶴は、他の鶴とはちがひ、大變に年を取つて居つたやうであつた。僕等が見て居る間に、すぐ一羽の鶴が其弱つて居る病氣らしい鶴を脊に載せて奥庭の方に飛んで行つたよー」

正 「君の云ふ通り確かに其は親子の鶴だよー、鶴といふ鳥は大變に親に孝行な鳥で親が病氣でもあるか、又負傷でもすると子供は親の元を離れる事は無い。他處へ行く時は子供は親を脊に乗せて飛んで行く、唯子が親に孝行で

あるばかりでなく親の方でも子が親に對するよりは一層子を大切にする、鶴ほど親子仲の善い互に親切な鳥はないよ、先日九州の酒井と云ふ村に火事があつたが、屋根の上に鶴が巢をつくつて居つて火事最中にどうかして自分の子供を救はうと百方を盡くしたが火の手が強くと煙にまかれてどうしても救ふ事ができない、見物人は下で其様子を見て子供を救くる事が出来なから早く煙にまかれぬ内に居てくれればよいと思ふてしきりに見居つたが、親鶴はとも子供を救ふ事ができないといふ事を知つて、自分も子供と一しよに火の中で死んでしまつた事がある、人間の内で親は子の爲め、子は親の爲めに生命を捨つるものは極く少いが、鶴はそうではない、親は子の爲め、子は親の爲めに生命を捨つるのが通例である、又鶴は仲間のものゝ内に何か困難な事に出遇ふ事があると、すぐ鶴のなく一聲を聞いて多勢のものが、我れも〜と自分を忘れて助けにくる、其はそれは感心

だよ

福 「其で僕も解つたよ」

正 「何が解つたよ」

福 「ウン、そうかな、感心だな」

正 「何がそうかな、だが感心だか僕にはさつぱり解らない」

福 「君聞き給へ、先程子が親を脊に乗せて奥庭に行つて妙な聲して鳴出すと二十羽も三十羽も五十羽も鶴がやつて来て病人らしい鶴を何處かへ連れていつてしまつたよ」

正 「其れ見給へ論より證據だ僕の云うた通り鶴と云う鳥は感心な鳥ではないか」

福 「僕も正月早々然かも元日から鶴の親孝行には實に感心した、鶴ですらあの通り親孝行であるから僕等も鶴に劣らぬ様に親孝行をせねばいけない」

正「左様とも〜君もよい處に目がついた、必ず親に孝行を爲給へ」と福松と正作の二人は互ひに正月元日早々めでたい鶴の話をしていゝ鶴の一聲「孝行」から大切な教を學びました。

一〇六

第十四 迷子

貞次と云ふ十二歳になる男の子と、お由といふ今年とつて九つになる女の子があつた母さんにつれられて、東京の都から信州の山中谷中村と云ふ處に村長をして居る叔父さんを訪ねて参りました。

貞次もお由も東京の地を出て田舎に來たのは是が初めてでありますから、東京の町の中央で見るとは、見るものが何でも彼でも珍らしく、毎日々二人で色々な野の花を取つて來たり、色々な形のちがつた木の葉を集めたり、又流川からうつくしいすべ〜した小石などを拾つたりして、楽しんで居ました。

だが、或る日二人はいつもと違ひおかしな顔をして歸つて來て

貞「お母さん、此の山中にも東京の町に居る様な口の悪い子供が澤山居ますね」

母「お前は どうして其を知つて居りますか」

貞「だつて今向ふの谷で馬鹿野郎の三太郎めと云ふと其に口答へをして向ふからも馬鹿野郎の三太郎めと云ふんだもの、あんまり失敬な奴だから貴様ぶんなぐるぞと云ふと又あちらからも貴様ぶんなぐるぞと云やがるから、さあ來いと大聲を出すと又あちらからも大聲でさあ來いといふだもの、お母さんは田舎の子供は質樸だといふけれども田舎でも都でも悪い子供には變りはない様ですよ」

母「お前はも一度あの谷に行つて親切にやさしい聲を出して御覽、田舎は東京とは違ひ澤山よい子供が居るよ」

と云ひますと二人の子供は早々再び元の谷に参り

貞「おい君は感心な子供だねー。」

といひますとあちらからも

子供「おい君は感心な子供だねー。」

と答へました。

貞「君僕の處に遊に來給へ、お菓子をおげるよー。」

と申しますと、あちらからも

子供「君僕の處に遊に來給へ、お菓子をおげるよー。」

と答へました、二人の子供は嬉しそうに再び家に歸り、母の元に来て

貞「おつ母さん、なる程田舎の子供は感心だよ、前の子供とはちがひ、君僕の處に來給へお菓子をおげるよーと云ふと向ふからも、君僕の處に來給へ

と申しますと母は二人の子供に、

母「お前達は始めて田舎に來て何にも知るまいけれどもこの山中にはやまびこと申して、こちらからいふ言葉が山にあたつて、再び其同じ言葉がかへつて來るのである、其通り人に對するのと同じ事で、こちらが悪い言葉をいへば、其報いに悪い言葉、此方がよい言葉を云へばそのむくいによい言葉が歸つて來るのは當然の事で、葡萄の木には茄子はなりません、故に人に親切をすれば、必ず人から親切にされます。」

といひ東京ではとても子供達に實際を経験さして教ふる事の出來ない慈を申しへて聞かしました。

日の經つのは早いもので、昨日東京を出たかと思ひましたにも早や一ヶ月もたち去り、明朝はいよ／＼谷中村を出立し長野に立ち寄り、善光寺を見物して、東京にかへる事になりましたから、二人の子供は田舎に居るのが今日限りと、

晝御膳を食べるや早々急いでいつもの通り外に出て行つてしまいました。

いつもなれば近所の子供と一緒に遊びに行くに此日に限つて、唯二人づれで出かけましたから、どうした事か道を間違へて、いくら行つてもく毎日遊に行く山の中腹にある宮の處につきません、其中にお由は

妹『兄あん、何だか此道はいつも行く道とちがふやうですよ。』

兄『そうだな、何だか違ふやうだな、然しも少し行つて見やう。』

と行く程大木のある岩だらけな、非常に険しい所に参りました、其内に早や太陽はだんくと西に傾いてきて、足もどが見えなくなつてしまいました。

妹『兄さん、私は恐くなつて来た、いつお母さんの所に歸へれるかね。』

兄『さあ何でも道を間違へて、とんでもない所に来たやうである、困つたね

へ僕も泣きたくなつて来た。』

と云ふて、二人は進む事もせず、又退く事もせず、誰れか助りに来てくれる人

はないかと思ひ、待つて居りましたけれども誰一人捜しに來てくれる様子もありません。其内いよゝゝ眞つ暗がりになりました、遠くには狼の聲がオーオととうなり、狐の聲がキャン／＼ときこゑますと大風は大木にあたつてザーザと悲しい音をさします、時は未だ十一月の末であるのに、雪がチラ／＼と降つて來て見る間に積り始めました、この恐ろしいこわい眞つくらがりの山中に、二人の子供は狼の聲や、狐の聲に合して二人とも優しい聲で

『われには外の、かくれがあらす、たゞちからなき、このたましひを、ゆだねまつれば、みすてたまはで、なほもあはれみ、なぐさめたまへ、たのみまつるは、たゞきみのみぞ、たすけはすべて、御手よりきたる、よるべき身を、そのみつばさの、かげにかくして、まもりたまひぬ。』

と歌ひ、二人はひざまづいて、山をも動かす熱心な祈をして居りました。

家の方では、日は西に傾いて百姓は皆な歸つて來るのに、貞次とお由はど

うした事か歸つてきません、近所の子供は尋ねて見ても唯知らんといふ許り、母は非常に心配し、門口に飛び出て、今かへるか〜と待ちに待ちましたけれども、影も姿も見えませぬ、其内人の顔もわからぬ様に眞つ暗がりになつたばかりでなく、雪がチラ〜と降り始めましたから母の心は張り裂るばかりでありました。

村の百姓どもは、誰から聞くとなく、村長さんのお客の子供が知れなくなつたと云ふ事を聞きつたへ、一人集り、二人集り、とら〜二三十人も村長の家により集つてきました、二人の子供の行衛につきては、權兵衛といふ百姓は「この山中には大鷲が居つて二三月前にも近村の十三才になる子供を五里もさき迄ひつ獲つて行つた事があるから、二人の子供衆も彼大鷲に獲れたかも知れぬだんべー」と云ひますと、平八と云ふ百姓は大きな口を開いて「狼の奴めが二三日前に近村を大荒しにあらして二三人の子供を喰ひ殺したから、

二人の子供衆も狼にやられたかも知れだんべー」と云ひますと、作平といふ百姓は、「先程さぬ川の上流を通つたら、二本丸太が折れて居つたから、二人の子供衆はあの橋を渡る時、どんぶりと抛れたかも知れだんべー」と云ひ諸説紛々でありましたが、其の内重だつた百姓らしい男が、「いくら小田原評議をして居ても仕方がないから、何はともあれ死んで居られやうが生きて居られやうが、捜すのが急務」といひ出し、近村からも加勢の百姓をよび集めて参りました。

二時間も経たぬに百五十人も集まりましたが、其集まつた者を五十人宛三組に分ち、各々箕に雨笠を冠り、手には松明を燃して、恰度戰場にでも向ふ様に法螺貝を吹くもあれば太鼓をた〜く者もあり、又拍子木を打つものもあつて其装は如何にも勇ましくありました。

三組に分れたる百五十人の人々は一方は北の山に登り一方は南の山に登り、

一方はきぬ川の上流にさかのぼり、夜中捜しましたがどうしても、分りません
 そうこうする内に早や太陽も東から昇つて夜も明けやうとしますから、最後に
 三組一緒になつて天神山へ登り大本の古い茂つてゐる岩だらけの阻しい所に参
 りますと、二人の子供は寝た様に、雪だらけになつて岩の上に伏して居りまし
 た、驚いて近づいて見ますと、妹のお由は頭に兄さんの帽子を冠り、身體にも
 兄さんの羽織と着物を着貞次は襦袢と股引ばかりでお由を確りと抱へて、二人
 とも氷の様に冷たくなつて凍へて居りました、多勢の百姓は手にもつて居る
 松明を大急ぎに積み上げ燃火をしてやうくの事に二人を蘇生らし母の元につ
 れ歸りました。

第十五 一本の蠟燭

相州浦賀久里ヶ濱に一軒の破屋の漁家がありました、この家にはお鶴といふ

十五才になる、人品のよい、愛嬌のある娘と、六十歳位な阿父さんと、唯た二
 人暮りで、阿父さんは毎日大働に出で漁をし、お鶴は毎日糸を取り、機を織つ
 て日々の煙を漸うたてゝ居りました。

或る日阿父さんはいつもの通り漁に出ましたが、いつも歸る時分と思ひます
 に、阿父さんの影も姿も見えません、お鶴は三つの年に阿母さんに別れ、阿父
 さん一手に育てられましたから、阿母さんに對する情と、阿父さんに對する情
 が一つになつて、阿父さんのみに盡すのでありますから、阿父さんを愛する
 熱情は非常なもので、誰一人お鶴は親孝行だといはぬものはありませんでした
 さて歸る時分に阿父さんは歸りませんから、お鶴が心配をするのも最な事
 あります、お鶴は今か今かと海岸に出て、首を長くして見て居ります内に、日
 は西山に傾き、三日月が現れましたが、おほる月夜で、時々微に顔を出すばか
 りで、河となく寂しく、空具合が荒氣色だと思ふて居ると、一寸先も見えぬ

暗がりの夜となり、見る間にドゥ〜とうなる大風が吹き来り、今まで寝て居つたかと思はれた静な波は急に起き上り、激浪となつて自分の立つて居る足元まで押し来りましたから、止むなく家に入つて戸をかたく締め、今か今かと、祈りつゝ、阿父さんの安着を待つて居りましたが、早や山寺の鐘の音が、ゴーンゴーンと、二時を報じましたに、また阿父さんのお歸りはありません、お鶴は恐ろしくこわくなつて参りました、若しや萬一にも阿父さんの御身の上に變事が起つたのではないかと、親を思ふ孝志の心、張り裂くる許りに、胸に迫り、熱い涙は目からポツリ〜と流れ出ました、嗚呼阿母さまがおいでなかつたらよいのにと、十二年前に死に別れました阿母さんが戀しくなり、何だか阿母さんのお顔が見える様な心地がいたしますから、消えんとする燈を何度となく明るくして、阿母さんのお顔を見やうと致しましたが、心に書く阿母さんのお顔の外に見える御顔は何にもありませんでした、其内風も大分静まつたと思ひ、雨

戸を開けて海を眺めますと、黒雲は風の爲めに吹き拂はれ、星は降るやうに澤山に現はれ、明星は一入光を放つて居りましたが、間もなく曉鴉はカア〜と一聲二聲鳴き始め、見るまに東天は漸く白くなり始めましたから、お鶴は飛び立つやうに家から飛び出し、濱邊に行つて見ますと、確に阿父の乗つて居た自分の家の舟と思ふのが、見る影もなく破碎て砂の上のし上げられてありました、其舟を見たお鶴の心は思ひやられます、此破碎た舟に乗つて居られた、阿父さんは何處においでなさるか、死んでおいでなさるか、又は生きておいでなさるか、嗚呼知りたいたいものであると、唯だ阿父さんの安否のみを思ひ、舟には碌々氣もつけず、濱邊づたひに先へ先へと二三丁も進んで参りますと、小川の口に無残にも阿父さんの死骸を見出しました、お鶴は三才の時に母に別れ、今又柱と頼む父と死別れるやうな、悲惨な娘となりました、然し親を思ふ心は益々厚くなり、どうかして神の爲め親の爲め、たとへ娘ながらも、阿父さんの志

をつぎ、何事かよいことをして、親に孝を盡くし、神の榮を顯したいと堅く決心を致しました、お鶴は毎日朝早くより起きて機を織り、夜は遅く迄糸をより暇があれば書物を手にして勉強し、無駄言は一口も云はず、どうしても通例の漁師の娘とは思はれませんでした、其れも其筈です、父は元士族で非常な開國論者で、どうしても日本は門戸を開いて、外國の新文明を輸入しなくてはいいないと主張した爲め、藩主の御意にもとり、遂に破門せられ、止なく身を漁師にやつしたのであります。母は立派な教育を受けた家柄のよい旗本の娘でありました、よい母の子によい娘のできるのは當然の事です。

お鶴の父が無残な最後を遂げた譯は外でもありません、久里ヶ濱に對した沖に非常な危険な一つの岩があります、いつも不意に荒れでも來ると、大概のものは此岩に當つて舟を破碎し、又生命をも取られるのであります、お鶴の父もこの岩の爲めに死んだのであります、お鶴に取つてはこの岩は父の記念碑であ

ります、誰れいふとなく此岩を「人殺し岩」と名づけたのも適當な事でありませす、お鶴は父を失つた其夜から嵐しの夜は必ず一本の蠟燭をつけ、自分の家の兩戸の大きな節穴より光を輝らし「人殺し岩」に當つて死なんとする人を、何人となしなく救ひました、お鶴は自分の二人となし大切な父をこの「人殺し岩」の爲めに亡くなしましたが、其獨り失つた父の爲めに數百人の生命を救ひました、今を去る五十年前、七月七日の夜は、近年稀な大荒れの夜でありました、激浪は大海より打ち來りて、お鶴の家をも今にも洗ひ去らうとする有様でありました、お鶴は何恐るゝ色なく、泰然と一本の蠟燭を手にて、節穴より一生懸命に輝らして居りました。

嗚呼此一本の蠟燭は唯だに久里ヶ濱を輝らした光ではなく、日本人民を輝らした光でありました、あゝ此一本の蠟燭は唯だに數十人の生命を救つた許りではなく、日本人民を救ふの光でありました。

あくる朝早く家の外に出て見ますと、浦賀から幾百人となく、實に多勢の人々が久里ヶ濱に立つて、しきりと沖を眺めて居りました。

長八「あの沖に見えるのは何だい」

作平「鯨が四疋珍らしくやつて来たよ」

長八「馬鹿いへ、鯨が黒い煙を吐くものか」

作平「ウン、ソウダ、なる程長い棒から黒い煙が出て居る」

長八「不思議だなア、何だろー」

平助「昨夜の荒しに海から化物がで、来たのだろー」

長八「馬鹿いへ、お化が晝間出ものか」

と何だかさつぱり解りませんから、口から出鱈目を云ひ、色々の説の起るのも最もな事でありました。すると一艘の小舟に二十人許りの軍人乗せて濱邊に着きました、見ると日本人でなく、皆外國人でありました、初めて米國から

ペルリと云ふ大將が使者となつて、日本と交を結びに来たといふ事が解りました、四つの鯨とかお化とか思ふたものは、大した四つの軍艦で、其名を「ソクイハナ」、「ミシ、ツビー」、「サラトガ」、「プリマウス」と申しました、此四艘の軍艦は昨夜の荒に、あぶない事に「人殺し岩」に當つて破船をいたすところでありましたが、お鶴の一本の蠟燭は此四艘の軍艦を救ひました、今日日本が外國と交際を結び文明の國と呼ぶやうになつたのは此一本の蠟燭がたしかに與つて大に力があります、實にお鶴の力は大了たものです、心さへあれば十五才の娘でも、蠟燭一本で大仕事をなす事が出来ます、米友會が發起となつて先年七月八日久里ヶ濱にペルリの記念碑を立てましたが、米國人は紀念として久里ヶ濱に燈明臺を建立するのは適當な事と思ふたのは、一つはお鶴の大功を認め、其紀念ともしたい心があつたからであります、當日は米國政府はわざわざ軍艦を派遣して祝意を表し、又軍艦上で盛大な宴會を開き、數百人の人々を招

きました、其中には總理大臣も、外國公使も、大學者も、軍人も、實業家も、新聞記者も、あらゆる社會の人が居りましたが、木綿着物を着た六十五六の老婆さんが、此盛大な宴會の席に招かれ、最も鄭重なもてなしを受けたのは、五十年前の今日蠟燭一本で日本國を輝らしたお鶴でありました。

第十六 牛のちゝ配達

信一と云ふ子供が、學校から歸る途中巢鴨一丁目の角で、誰れ云ふとなく、人殺し〜〜と大勢の子供がガヤ〜と、染井の方に向ひてかけて行きますから、信一もこわい半分、面白半分でかけて行つて見ますと、十三四位の男の子が、手に牛のちゝのびんをさげながら、馬にけられて氣絶して居りました、其あたりには子供の足から流るゝ血と、こぼれた牛のちゝがまぜかえつて、一ぱい流れて居つて目もあてられぬ、かわいそうな有様でありました。

信一はきせつして居る子供に、いそいでびんにのこつて居つたちゝを、飲せますと、ウムといきをふきかへし、目をぼつちりとあげました、よく其子供の顔を見ますと、自分の近所の牛のちゝやで、自分の處へも毎日ちゝを、配達する子供の長七でありました。

信一は速ぐ近處の雨戸を一枚かりまして、五六人かゝつて親切に、長七の家までつれていつてやりました。

家では六十位になるお婆さんがたつた獨で、牛小屋の、掃除をして居るさい中でありましたが、雨戸にのせられて歸つてくる、子供を見てびつくりしてかけ出してきて

母『どうも皆さん御親切に、有りがとうござります、子供が助かりました。』と云ふたばかりで、あとはウン〜と泣いて居りました、

信『お婆さん、あすから牛のちゝをしぼるにも、又配達するにもこまるであ

ろうねえ。』

母『御存の通りこの子と私と、唯二人ぐらしでありますから、この子に病氣になられては、もうどうする事もできません。どうもこまつたことになりました。』

とあとは又泣く許りでありました。

信『お婆さん、牛のち、をしぼるのは、ひつかしいかねえ。』

母『エ、なれ、ば何んでもありませんが、始めは一寸むづかしいです。』

信『僕にも出来やうか。』

母『それはやつて出来ない事はありません。』

信『では僕はお父さんやお母さんと相談して、すぐきて長さんの病氣のなほるまで、長さんのかはりに、僕がち、をしぼつたり、又ち、を配達してあげやう。』

と云ふて、お婆さんの止めるのも、かまはずにかけだして家に歸へつて行きました。

信一は家にかへつて、お父さんとお母さんに長七の馬にけられた事から、お婆さんが一人でこまつて居る事を話し、自分は長七のかはりになつて、かわいそうなお婆さんを、助けて見たいと思ひまして、両親にゆるしを願ひますと、両親は非常に感心して。

父母『人を助くるのは立派な精神である、子供でも其の精神があれば、必ず人を助ける事が出来る、書物を読むばかりではやくにた、ぬ實際に自分で人を助けて見なくてはいけぬ。』

と云ふて非常に信一をほげました。

信一はいよ、長七のかわりになつて、毎日牛のち、の配達を始めました。すると學校の中間のものは、なんにも知らずに、多勢よつて毎日信一をけい入。

つして悪口さまへ

庄一「オイ、信ちやんお前はなんだつて牛のち、屋になつたの。」

仙太郎「お父さんか、貧乏でもないのに、信ちやん牛のち、屋なんかはよし給へ。」

金三「君ち、に水なんか入れて人をだましてはいけないよ。」

新太郎「牛のすきなねぎをくわすとち、がじきにながくなるよ氣を付け給へ。」

助七「ア、君は牛の様にくさくなつてきたよ。」

苦三「ア、君の顔まで牛になつてきた。」

と非常に馬鹿にされましたが、心の内では人を助ける程ゆかいな事はないと、何んといわれてもかまはずに、長七のかわりをして居りました。

信一は朝くらい内に、一軒のかど口に一合入りのち、のびんをさげやうと、すると、内から下女が大聲で、

下女「ち、やさん、お前はいけないではないか、この二三日びんには牛のち、

は入ては居らないよ、水ばかりだよ、だんながおこつて、ことわつてくれと、おつしやつたよ、もうけふからち、は入らない、ち、やさんびんをもつて歸ておしまい、人のわるい事をするといけないよ、拂はいつでも取りにおいで。」

と言ふたばかりで、こちらから言ふ道理は、すこしもきかず戸をしめてしまいました。

信一はききたいな事があればあるものであると、しきりに考へ、入口にかけたびんを取りもせず、自分はお家のかけにかくれて暫く立ち止まつて居りました。すると、向ふから、一人の小供がやつてきまして、しきりとあちらを向き、こちらを向きまして人のくるか、こぬかをうかゞつて入口にかけてあつたち、のびんををろし、其の乳をなにかにあげて、何知らぬ顔して、あちらにゆこうといたしました。

信一「は其の怪しい様子を見とめ、後から行つて

信二「乳泥棒ッ。」

と言ふて、逃げやうとする子供を、ひつかまへて逃さじと、手をつかまへたり
おびをつかまへたりして、とう／＼おさへつけますと、

泥棒「どうかゆるしてください。」

信二「馬鹿言へ、貴様の爲めに己れが泥棒になつた。」

泥棒「ちゝはかへします。」

信二「ちゝをかへしても泥棒は泥棒。」

泥棒「もう致しません、ゆるして下さいさゆるしてください。」

と云ふ聲がだうも何處かで聞た、聲の様でありますから、よく／＼くらがりて、
其顔を見ると先月まで學校で、一緒に遊で居た龜吉と云ふ子供でありました。

信一は驚て

信二「君は龜ちゃんではないか。」

龜吉「あなたは信ちゃんではありませんか、どうしてあなたが、牛の乳屋にな
りなさいましたか。」

信二「其れはどうでもよいが、君はどうして乳泥棒になつた。」

龜吉「どうも濟みません、お恥づかしいわけですが、先月まで無理をして學校
にあがつて居りましたが、どうもお父さんの病氣がひどくなつて、お母さ
んの手だすけをして、巻煙草の口を付けて助けて居つたが、どうも思ふ様
に助けに來らず、お醫者様のおつしやるには、この病人には、牛の乳を飲
さんでは、いけぬと、おつしやつたが、さあ其の乳を買ふ錢はなし、わる
いとは知りながら、二三日前から乳泥棒を始めたわけです、君の配達の乳
を取るとは、夢にも知りませんでした、どうも濟みません。」

信二「いくら貧乏しても泥棒しては、神様に對して大きな罪ではないか。」

龜吉』どうもすみません。』

と恥しがつて頭をよくあげませんでした。

信一は龜吉のあとについて、龜吉の家に行て見ると、それ／＼ひどいくらしです、信一は見兼ねて自分が、少し宛貯蓄した金で、毎日牛の乳を一合宛をやる様に致しましたが、其内長七の病氣もなほつて、禮がへしとして、長七が自から一合づゝ龜吉のお父さんに贈る事になりました。

数年の後ち、日本で有名な慈善家となりて、内外に名をあげたは、この森田信一であります。

人の品性の内で、人を助ける程、貴い徳はありません。

第十七 三人娘

栃木縣佐野在に高山と云ふ村があります、二三十年前はよい村でありました

が足尾の銅山から流れてくる毒水の爲めに畑は悉皆役に立たぬ地となりました。名は高山であります、土地は極く低いので洪水毎に渡良瀬川から流れ込む水は中々ひきません、漸く水が無くなつたと思へば後に毒を殘して行くのです、昔は洪水毎に山から肥料が流れ来るので、水の無くなつた彼に野菜物などが善く出来ましたので其度毎お祝を爲しましたが、銅山が始まつて此方と言ふ者は、お祝どころではありません、百姓が皆泣くのであります。

この村で松本與市と申せば、中々たいした百姓で、大變に大きな畑をもち、家と云つたら一抱もある様な大黒柱のある家で、土藏の三ツ四ツもあつた金満家でありましたが、七年此方は洪水毎に畑がだん／＼悪るくなり、麥を植ても桑を植てもあげくは霞を植ても出来なくなり、銅の毒と云ふ者は恐ろしい者です、霞を刈て火をつけて燃して見ると、硫黄の様に青黒い火が燃えて、其臭と云つたら鼻を貫き通す様であります。此與一に十五になるお信と十三の

一三二
お希と十なるお愛との三人の娘がありました、畑は何も出来なくなり、四ツまであつた倉は借金の爲めに皆人に取られてしまい、大きな家は譜請したいにも金はなく、屋根に大穴があいても其儘です、壁が落ちても近所には銅の毒のまぢつた土ばかりで、いくら塗ても粘りけがないからおちてしまいます、日日の食物におわれて家にある者はみななくなり、唯残つて居る者は先祖代々から傳はつてる金箔塗の位牌が二三十も石油箱の中にゴロ／＼して居ります、位牌ばかりは賣らうにも買てがなく、借金取も之は持て参りません。父の與一は氣がへんになつて毎日々々ぼんやりして何にも働きもせず泣てばかり居ります。母のお民は此有様を見るにつけ自分も涙の乾いたことはありません、此時にお信とお希とお愛の三人はこのあばらやの光でありまして、よはり果てた兩親をしきりと慰めました、何より二親の力となつた者は此三人の娘でありました。近所の者は誰云ふとなく此三人を天女だと申して居りました、お信は朝早く暗

一三三
がりの内から起きて、夜十二時頃まで機を織り、一日わづか十銭か十二銭さえ取りませんが、この辛い働きもお母さんの爲と思つても一つも吾儘な事を言ふたためしはありません、いつも笑顔をして毎日々々機を織りながら「神は吾城なり力なり」と優しい聲で歌をうたつておりました。この子は中々まけん氣の性質で思ふた事は何んでも遣り通す方で、それに疑が少なく神信のあつた娘でありました、お希と云ふ次の娘はお信とは丸きり性質が異い何事も氣にかけず、身には汚い縋縋を纏い、雨の漏る様な家に住い、三度の御飯を二度さえたべる事が出来なくとも、少しも氣にかけず、朝から晩まで日のあたる椽側で細をよつたり草鞋を作たりして一日にたつた五銭か六銭位しか取りませんが顔は天女の様な顔をして少しも不平を云うた事はありません、そのうちに畑ももの様に成り歳も四つ處ではない六ツも七ツもできる。家も今より立派なものが出来ると毎日毎日獨話して、現在の苦みも貧乏も何とも思はず、姉と妹の働いた

錢とて漸くの事に兩親を養うて居りました、お愛は歳は十歳であります、せ
 いがすらりとして姉のお希より高く、お愛をお希の姉の見違ひる程でした、お
 愛は顔が少し青白く、よく氣をつけて見れば何んだか目のあたりに少し悲しげ
 な處がありまんが、顔は愛らしい方で頬には二重のえくぼがありました、この
 お愛は一里もある佐野と云ふ町は紙屑屋の間屋に雇はれ毎日べんとろを下げて、
 紙屑から縋縋を取分けに参りまして一日に僅か六七錢取つて居りました、兩親
 は三人がまだ十五や十の娘であるのに、機を織たりわらじを作つたり、又紙屑
 屋に雇われたりして、兩親を養うてくれるのを見るにつけ、嗚呼持つ可き者は
 子供であると喜んで神様にお禮を申して居りました、親孝行の子供もつた親
 達は幸福であります、始の内は兩親とも悲の涙ばかり流して居りましたが、
 孝行の娘どもの顔を見るにつけて元氣が出て、おしまいは悲みも涙も喜の
 涙と變り、あばら家も御殿の様に見ゆる様になりました、又銅の毒に荒らされ

た畑や、こわれかけた家などには少しも氣をかけず一生懸命に働く様になりま
 した、それですから家の暮しもだん／＼よくなりました。そこで兩親はまだと
 しもいかぬお愛に毎日毎日雨がふつても風がふいても一里二里も歩ます事はよ
 くないと氣が付きましたから、お愛を紙屑屋へ通はす事をよささうと致しまし
 たが、お愛はなか／＼親の心付を心よく受けません、どうかもすこし私を紙は
 屑屋へやつてくださいと云ふて少しもよす氣はありません、實に奇妙なことで
 ありませんか、働けど云ふても厭だと云ふ子供は澤山ありますのに、お愛は止
 せと云ふのにどうぞ働かしてくださいと願ふのであります、親もおかしく思ひ
 ましたから、何故紙屑屋へ行たいかと段々尋ねますと、お愛には是非紙屑屋へ
 行きたい理由がありました。其理申とは何でせう、何故まだ十歳ばかりの娘が
 紙屑屋へ行きたがつたでせう、お愛の同じ村のはづれに七十になる盲のお老婦
 さんがありました、お愛が佐野に行來に何時も此お老婦の處に寄り、いろ

話をして慰めて居りました、或日のことお老婦の談しますのに

老婦「私にはたつた一人のまごがあるが東京で大病だと云う報がありましたけれども行く金がないには困りはて、居ります。」

と泣いて居るのです、お愛は之を見て誠に氣の毒に思いどうかして助けたいと思ひまして、種々考へて見ましたがお老婦が東京まで行くに費用なのは七八十錢の流車賃ですがお愛の持つてる筈はありません、両親から貰ふ譯にも行かず、明けても、暮てもそればかり考へて居りましたが、或日の事突事紙屑の中からライオン歯みがきの袋をひろいあげました、よく見ますと此袋をライオン歯みがき取次處へ持つて行きますと、一厘にかつてくれると云ふ事がかいてありましたから、大に喜び之は天の賜だと思ひ毎日々々歯みがきの袋をさがしあてゝ氣根よく六百枚ためました、も百枚たれば七百枚、それで七十錢になりますから、盲のお老婦を東京にやる金にやつて唯一人の孫の死めに會うことができますから、是非お老婦を助けたい爲めに紙屑屋に行きたい、やめるのは厭だと云ふたのでありました、両親もそれを聞いて非常に喜びました、お愛は自分の事は思はず氣の毒な人の爲ばかり思ふて居りました、盲のお老婦はお愛の情で東京に参り孫の死めに會う事が出来ました。

第十八 小僧 入用

直太郎といふ今年とつて十三才になる子供は母と一緒に、住み慣れた信州小諸をあとにして、唯一人柱と頼む、東京小石川柳町の叔父さんの家を、重い荷物をおかつぎながら、やう／＼の事に、尋ね尋ねて來て見ますと、叔父さんは鼻の事に疔ができた爲め東京大學病院で、えらい御醫者様から、手術を受けました、其結果がよくなく、哀れにも昨夜遂に死去せられ、今朝病院から、死骸を引きとつたばかりで、家は顛倒る許りの大混雑中の處でありました。

叔父さんは七つを頭で四人の幼ない小供を跡にして死なれましたから、叔母さんの歎きは一方ならず、唯だ泣く許りで、碌々に自分達が出京してきた譯も話す事が出来ません、誰が見てもわざ／＼信州から葬式の爲めに出京した様に思ひましたが、直太郎に取つては、そうではなかつたのです、五つの年にお父さんに別れ、おつ母さん一手で育てあげられました、小諸に居ても前途の望がありませんから、叔父さんを頼りとして、どこかの中學校に入り、卒業の後、法律家になりたいと、大希望と喜を以て、無理にも母に泣きつき、母と一緒に出京した譯ですから、叔父さんの死去せられた事は、確に直太郎には、非常な打撃でありました。然し直太郎は再び小諸の地に歸るつもりは更にありません、一旦故郷を出た上は、錦を着なくつてはどうしても故郷に歸らぬとの大決心、然し乍ら柱と頼む叔父さんは亡くなりましたから、四人の子供を重荷に脊負つて居る、叔母さんのお世話になる譯には行きませんゆえ、葬式も濟

んだ上は、何處かの小僧に雇はれ、夜學校にでも通學して、人の世話にならず、獨立で苦學をして、後には始の志通り、立派に法律家になつて、おつ母さんにも叔母さんにも、御安心をなさしたいと確く決心を致しました。

叔父さんの葬式もつゝがなく濟みましたから、速におつ母さんの許しを受け、葭町の雇人口入所に參つて、小僧の世話を頼みましたら、幸な事には、直ぐ口が出来、慶菴の婆さんに連れられて、其家に行つて見ますと、日本橋通の立派な大きな店でありました、直太郎は大喜びで、其店に入つて見ると、喜ぶ處ではなく非常に驚きました、この店は大きな西洋酒の間屋で、向ふにはアルコールの大きな瓶があれば、棚にはブランドーやウヰスキーの瓶が澤山に並んでありました、桂庵婆さんは主人に

婆「御依頼の小僧を連れて參りました、」

主人小僧に向ひ

主人「年はいくつか。」

直「年は今年取つて十三歳になります。」

主人「小學校は何年まで行つた。」

直「高等科三年迄参りました。」

主人「名は何といふ。」

直「直太郎と申します。」

主人「國はどこかへ。」

直「はい、信州小諸のものであります。」

主人「己の店で七年辛棒する氣があるか。」

直太郎は青い顔をしてうつむいたがり、何とも答をしませんから、傍に居た

慶菴婆は大きな口をあけ、

雙「この御店は日本第一の西洋酒の間屋で、年々外國から大變な金高のお酒

がくるのだよ、あれご覧、アルコール、ブランデー、ウエスキ、それ葡萄酒もあります、酒ならば何でもありますよ、いゝ事ね、私たちは見た許りで口から唾がで、くるよ、其に此店の小僧さんになれば、瓶が碎れた時には、其の高いブランデーでもシャンペンでも飲めるよ、私ももう一度男の子に生れ變つて来て、此お店の小僧さんになりたいよ、此店の旦那は政府に毎年、何百萬圓の税をお納めになるよ、大した物ではないか、お前も小さな酒屋をだして貰へるよ、其店を元として遣り上げれば、此お店の様になれるよ、よい事ね、酒程賣れ口のよいものはない、商賣をするにはこれが一等だ。」

と口を酸っぱくして、早く直太郎に納得さして、手数料を取ろうと思ひ、説得いたしました。直太郎は非常な氣高い、意志の確い子供でありますから、中々慶菴婆さん位の説諭には應ずる景色はなく、うむついて居る頭を上げ

直「私はこのお店に御奉公するのはお断り申します。」
と明然と云ひ切りました、主人も慶菴婆さんも、其言葉を聞いて案外に思ひま
した、主人は

主人「酒屋になる気がなくては仕方がない、何故酒屋になるのがいやなのね
と云ひますと、直太郎は涙を流しながら、
直「ハイ、お父さんの爲め又お母さんの爲めに酒屋にはなれませんか。」

主人「それはどう云ふ譯だへ。」
直「私の家は元は信州小諸第一の酒造家でありました、父は酒の爲めに、
身も家も亡し、私の五つの年に亡くなりなさいました、母は幼い時から
酒の害のある事を教へ、私に一滴の酒も飲んではならぬとの仰がござり
ます、其に私がお母さんに對し、いくら貧乏して小僧になる身とはな

りましたからと云ふてどうしても、酒屋に奉公をする事はできません。」
と赤心を顯はして、言葉正しく、靜に物語りましたので、主人も慶菴婆さんも、
一言の言葉も出す事ができないばかりでなく、傍に聞いて居た三四人の小僧も
大に教へられた所がありました。

直太郎は慶菴婆さんに別れた後、銀座通を歩いて居りますと、大きな時計
屋の入口に、小僧入用とある、貼札を見ましたから、喜んで其處に入り、小僧
に雇つて戴きたいと申しますと、一人の小僧は直太郎を案内して主人の居る部
屋に連れて行きますと、主人の部屋には既に七八人の、自分位の年齢の子供
が椅子に腰を懸けて、主人の廻りを取りまいて居りました。直太郎は主人の顔
を見て、丁寧に禮を述べ、小僧になりたい志願を云ひ述べました。

主人は直太郎を始め、七八人の子供に年はいくつであるか、名は何と云ふか、
國はどこであるか、両親があるか、小學校は何年迄學んだか、七年は辛棒して

奉公するつもりはあるかどうかと一々一人づつ詳しく聞きました後ち、

主人「今日はこれで宜しいから、皆なお歸りなさい、歸る前にまちがない様に町名と番地を書いて置いて行つて下さい、奉公人に頼む時は、こちらから端書をあげますから、其節は直ぐおいでなさい。」

と云ふて候補者となつて来た小僧を皆歸してしまつた後に番頭を呼んで、

主人「今小僧になりたいと云ふて一番後ちに入つてきた直太郎と云ふ子供が一番よいやうに思ふから、小石川柳町十三番地横井みね方田中直太郎と書いて、明朝早々来いと云つてやつてくれ。」

と云ひ付ますと番頭は變な顔をしながら

番頭「直太郎がお氣に入りましたか、今歸りがけ、八人の子供によく店の規則を読んで聞かせ、雇はれる時は東京市中に確實なる證人が二名なければならぬが、雇はれる上は皆な證人があるかと聞きますと、七人の子供は皆な

あると申しましたが、直太郎一人はたよりとする叔父さんは二三日前に亡くなり、證人になつてくれる人は叔母さんより外には誰もない、其は女の證人となれぬならば、私には誰も東京に證人になつてくれる人はありませんと云ひますから其ではお前は氣の毒だが、落第であると申しましたら大變に失望した風で、目から涙をボロリと流しながら、歸つて行きました、證人がなくつてもお雇になりますか。」

と聞きますと、主人は笑ひ乍ら、

主人「あの子には證人はいらぬよ、あの子自身が證人だよ」

と云ひますと、番頭は變な顔の上に猶變な顔をしながら、

番頭「へーエ、あの子自身が證人ですか、へーエ奇態で御座りますね、

私にはさつぱり解りません。」

主人「彼の子が此の部屋に入る前には外の子とはちがひ丁寧な靴の泥を拭ひ、

戸を開けるにも、閉めるにも、チャントと締めた、其を見てあの子は規則正しく奇麗好きだと云ふ事を知つた、どーだ。』

番頭『恐れ入りました。』

主人『其にあの子の後に番頭の治平が入つてきたら、席を譲つたのはあの子ばかりだつた、あいつは思慮深い親切な奴だよ。』

番頭『恐れ入りました。』

主人『己の問ふ答には外の子供とは違い、何を聞いても明然と言葉づかいもいやしくなく丁寧であつた、あの子は何をさしても丁寧に違くない、どーだ。』

番頭『恐れ入りました。』

主人『己がわざと書物を下に置いたら他の子供は無頓着で其本を飛び越えたと、あの子一人は書物を取つてテーブルの上に置いた、實にあの子は用心深い子供に違くないと思ふが、』

番頭『恐れ入りました。』

主人『己が何を問ふも、一番に答へる事はなく、一番最後に答へる處を見ると謙遜な奴だな。』

番頭『恐れ入りました。』

主人『髪の毛は亂れては居らず、衣服は洗いたてのを着、齒は白くよく磨いてある處を見ると、あの子は好い家庭に育ち、よい母の教育を受けた子に違くない。』

番頭『どーも恐れ入りました、御主人のお眼鏡に感服いたしました、なる程仰の通りあの子自身が何よりな確な證人であります。』
と云ひ、端書を認め、直太郎を雇ふことに致しました。

直太郎は青い顔をしながら家に歸り、悲しそらに目から涙を折々流しながら今日あつた一部始終を話し、非常に失望の様子でありましたが、母は直太郎を

勵まし。

母「何事も皆神様の御心であるから、何も失望するには及ばん、唯正直にして居りさへすれば、一羽の雀を養ひ給ふ神は必ず吾々の前途を守つて下さる故に唯だ神に依頼するより道はない。」

と。母は愛心の溢るゝ言葉を以て、よく直太郎に云ふてきかせてました。

明る朝起きて見ると非常に驚きました、證人はいらぬ、お前自身が何よりの確な證人であるから、雇ふによつて來いとの通知でありましたから、直太郎は非常に喜び、母は云ふに及ばず、叔母さんも夫を亡くしてから始めてニッコリと笑ながら、喜びの涙を流しました。

第十九 猿の子

十三歳の信太郎と云ふ子供が、日の暮方、愛宕山の石段に腰を懸けながら、

十五六歳位な常吉といふ朋友に

信「常ちやん、昨日御母さんと一しよに大森へ行つた歸り途に、芝明神に参つたがね、君も知つて居らうが、鳥居の左側に猿が何疋も居るだらう。」

常「其がどうしたのだい。」

信「何處の商人風の立派な旦那が、三つ位の女の子供に、其れはそれは美しい縮緬の衣服を着せて、剃り立ての西瓜のやうに青くピカ／＼光つた頭の中央につけ髪は唐人まげを立派に飾りたて、顔にはお白粉をべた／＼つけ如何にも自分の子供を自慢らしく、これ見ろと云はぬ許り、脊に負んぶして、うれしそうに猿の居る處に來て、其子供に猿を見せて居ると、どういら氣か、猿の奴めが突然箱の中から手を出して、可愛そうに立派な唐人鬘のつけ髪をさらつて取つてしまつた、その上爪でピカ／＼光つて居る剃りたての頭に傷をつけたから、子供はたまらない、キヤーと叫んだ、その聲

に驚いて親は見えてみると、子供の頭から血が流れて居るから、旦那は怒つたの怒らないのつて、絹の蝙蝠傘で猿をなぐらうとしたら猿の奴は其蝙蝠傘を、見る間にギザ／＼に裂いてしまつて、棒の先に座つて、濟ました顔をして居つたよ、なか／＼猿はひどい奴だなあ。

常 『そうか、そらひどかつたなあ、猿の奴は中々嫉妬で美しい衣服を着て居る者を見るとうらめしがるよ、矢張り人間も猿の子だよ、英國の大變なえらい動物學者のダーウインといふ人は人間の身體も靈魂も皆な猿からきたものであるといはれたそうだ、其は己等にはわからないが、君よく考へて見給へ、實際に人間の心でも顔でも猿によく似て居る處があるから、人間は猿の子と云はれても詮方がないよ。』

信 『ぶらん、そうかなあ、僕も猿の子かなあ、僕の家は藤原大納言の血統だといふて非常に威張つて居つたのだが僕の先祖は猿だと聞いては、もう門

閥だとか家柄だとか云ふて威張るわけにはいかぬねへ、なる程君のいふ通りたしかに人間は猿に似た處があるよ、僕の心に問ふても恥ぢる處があるよ、僕は四つ五つの時にはよく人まねをしたものだよ、姉があかべいといふと、こちらからもあかべいと答へたよう然し人から君の顔が猿に似て居ると云はれると何だか心地が悪いねへ。』

常 『そらとも／＼僕でも同感だよ、君其について太閤様の面白い話を知つて居だらう。』

常 『僕は知らない話してくれ給へ。』

常 『歴史に出て居る事だよ。』

信 『それでも僕は知らない。』

常 『君太閤様の木像を見た事があるだろうが其はそれは猿まる寫したよ、よくもまああんなに猿に似て居ると思ふよ。』

信 『それがどうしたのだエー。』

常 『君僕の話中途できつてはいけない、これから話すのだよ。』
信 『それは失敬。』

常 『或る時太閤様が野呂彦右衛門と云ふ御家來を呼び寄せ、大變に怒つて人は己の顔を猿に似て居ると申すそうであるが如何かと御尋ねになると、彦右衛門も其間には閉口した、まさか太閤様に向つて、左様あなた御顔が猿に似て居ると、あから様に云ふ事は出来ないから、大氣轉をさかして、どういたしまして恐れ多い事で御座ります、決して左様な事は御座りません、世間では猿が御前のお顔に似て居ると申して居るのでござりますと申し上げると太閤様もそうかと大満足であつたとサー。』

信 『君馬鹿を云ひ給ふな、猿が僕の顔に似て居ろうが、僕が猿の顔に似て居ろうが同じ事ではないか、太閤様の様なお方が其で満足なさるものかへ。』

常 『君はまだ子供だよ、同じ事でも物に云ひ様があつて、僕が猿の顔に似て居ると云はれるよりは、猿が僕の顔に似て居ると云はれた方がよいだらう。』

信 『顔は猿に似やうが、似まいが、どうでもよいが、心ばかりは猿にならん様にしたいものである、今日學校で英語を習ふ時に、英語で猿と云ふ言葉を學つたよ。』

常 『君覺えて居るか。』

信 『何でも「モンキー」とか「モンキ」とか云つたよ。』

常 『なぜ英語で猿の事を「モンキー」と云ふか其起りを知つて居るか。』

信 『僕は知らない、まだ漸く「モンキ」と云ふ言葉ばかり習つたほやく、だもの。』

常 『英語の「モンキー」と云ふ字は元の意味は小老人といふのであつたが、

今は「モンケイ」といふ意味は人真似と云ふ事になつて居るよ、猿の奴は小さな癖に老人ぶつて中々手にをへる奴ではないよつて、此間僕の向ふの家に飼つてある猿めが、しちりんに入つてる栗を自分の爪で割るには熱いから、猫をつかまへてきて猫の爪で熱い栗を割つて、其栗は自分の口に入れて食べたよう、つらい仕事は人にさして甘いものは自分の口に入れる奴だもの然し猿でも餘り高ぶるとやりそこなふよ、儀等でも猿の様に人の善いことを似せるとよいけれども、悪い事を似せるのはいけない、君時があるなら、猿が人真似をして大失策をとつた話をして、聞かせやうか。」

信「君話してくれ給へ、今日この僅の時間に僕は君から大變爲めになる事を澤山に聞いたよ、何でもよい朋友と交つてよい事を聞かなくつては、善い子供になる事は出来ない、僕は時間にかまはないから、君さへよくば話してくれ給へ、僕も受け賣りをして今日の話を近所の子供にも話して聞かしてやるよ。」

常「あんまり猿の奴めが人真似をするから、悪い奴だどうかしてあの森に居る澤山の猿めを皆な生捕にしてやりたいと、二三の人が相談をして小さな長靴を五十足も百足も造つて、其靴の内に仕懸けをつけて猿が其靴をはくとパチンと足に錠がありるやうにして、猿の澤山居る場所に行つて、二三人が自分の長靴をはいたりぬいたり、はいたりぬいたりして居ると、猿の奴は木の上から面白そうに人が靴をぬいたりはいたりするのを頻りにうらやましそらに見て居つたが、人はもうよからうと思ふて、自分達は木の陰に隠れて猿の奴はどうするかと思ふて、木の間からじつと見て居ると、猿の奴は木の上から二十疋も三十疋も百足もぞろ／＼下りてきた、猿めは其靴を見てうれしそらに、皆な一しよに其靴をはめると、其足にはチンと錠がかゝつたからたまらない、どうぬがうとしてもぬげない、どうあせつて

もいけない、さあと聲をかけて木の間から人が出てきたからたまらない、百疋ばかりの猿は兩足に長靴をはいて跳るやうにして駆けだしたけれども、中々走る事は出来ず、木に登ろうとしても足に靴があるから上つてはすべり落ち、又上らうとしては又すべり、猿でも足に靴があつては往生だ、とうく利口な猿も皆生捕にされたとさ」

信「これは面白い、僕も猿が靴をはいて駆けたり、木に登つたりするのを見なかつたなあ、もう僕は悪い人真似はよしにしやう、人から猿に似て居るといはれないで、神様に似て居ると云はれるやうにしやう、僕も猿とは今日から離婚して神様の子供とならう」

といふて今迄とは違つて、二人とも神の使の様な顔をして歸つて行きました。

第二十 ダイヤモンドの谷

正月二日の夕方、立派な紋付を着た商人風の若旦那が、お寶、お寶とある丈の聲を出して、いさぎよく番町の通りを賣つて歩いて居りました。

すると、外に遊んで居つた、十四五になる金太郎と、十二三になる銀藏の二人が驅けてきて、

銀「お母さん、お母さん、今お寶賣が外を賣つてあるいて居るから、買つて下さい、僕等は初夢を見て、今夜お金持になるのだから。」

と無理矢鱈に強請りますから、お母さんは、子供に寶舟を買つてやると、五錢の代價に寶賣は大まけに二十枚も置いて行きました。

金太郎と銀藏の二人はまだ九時になるかならないのに、早く寝て早く縁起のよい夢を見たい、早く金満家になりたいと唯金の事ばかり考へて、二人とも寶舟を何枚も枕の下に入れてねれば、餘計によい夢が見られると思ひ、慾張つて誰にも寶舟を分配す、二十枚の寶舟を十枚づゝ二人で横領で寝てしまいました。

次の部屋では母と九つ位ないもとのお鶴と下女のお竹お松の四人が、十二時頃まで面白さうに、歌骨牌を取つて居りますと、隣の部屋に寝て居る金太郎は、何か夢を見ながら、大聲で、「ワン／＼ワン、ウー」と犬の哀な死に聲をいれました、すると銀藏も何か夢を見たものとみえて、大聲で「コワイ／＼」と云ふて泣き出しましたので、母とお鶴は驚いて二人の枕元に行つて見ますと、二人とも起きあがつて何だか青い顔をして居りました、母は金太郎に向ひ、

母「お前はどうしたの、青い顔をして。」

金「僕は非常な金満家になつた。」

鶴「兄さんだつて今ワン／＼ウーと犬の死ぬ時の様な哀な聲を出したよう。」

金「そうか、犬の泣き聲が聞えたかへ、僕は年三萬圓の利子が取れる様になつたばかりでなく、金でも銀でも家中一杯に入れて置く様になつた。」

鶴「其では其金を人に施して、善い事が出来たらうな。」

金「處が金が蓄ると一錢も人にやるのが厭になつた、又自分でも使ふのがいやになつた、僕が汚い帽子を冠つて居るものだから隣の龜ちゃん、あんまり帽子が汚いから新しいのを買へと云ふたけれども、其新しい帽子を買ふのが厭だから古道具屋に行つて十五錢で一つ買つて來ると、向ふの車夫が旦那十五錢では安い、二十錢の價値があると云ふから、直ぐ五錢儲けて二十錢で賣つてやつた、雨でも降つて寒い日には、火鉢に火をおこすと錢が入るから、寢床に長く居ると、一錢も入らないから一日も寢通す事があるつた僕は煙草を飲まないけれども、煙草入を持ってあるくと人が一服お上がりなさいと云ふとそれを僕の煙草入に入れるのよ、一杯になると、煙草屋に行つて賣つて蠟燭に代へるのだ、寢る時が來なくては決して燈りは點けない、何にもしない時は暗がりでも居れるもの、顔を洗ふのは近所の池が川で洗ふのよ、石鹼を買ふと錢が入るから砂で結構さ、手拭はなくとも太

陽で顔や背は乾かせるよ、靴は磨くと皮が減るから決して磨いた事はない、食物も御馳走をたべなくとも生きて居られる、めし一膳で充分だ、家中が金で一抔になつたから、盗賊に取られてはならんと思ふて、一匹の犬を道で拾つて来て、夜番をさして居つたが、あまり食物を遣らないもんだから、とうとう死んでしまつた、又犬も物入だから自分で犬の代りをして、毎晩夜通しワン／＼と云ふて吠へて家の圍りを歩いて居ると、何疋も恐い犬がやつて来て、僕のぐるりを取りまいてひどい目に喰ひ殺したから、今驚いて目を醒ましたのだ、嗚呼金持になつたけれども馬鹿々々しい、僕はもう金持になるのはまつびら御めんだあ。』

母は銀藏に向つて

母 『お前は何を泣いて居るの？』

銀 『僕はダイヤモンドの谷に行つたよう。』

銀 『兄さんよい事ねへ、ダイヤモンドの谷はうつくしかつたらうねへ、お土産にダイヤモンド一裂片も持つてきて下さつたらうねへ。』

銀 『處がかな／＼お土産どころの騒ではないよう、ダイヤモンドの谷に入るに大變に峻しい岩がある、其間に大道があるが其大道には女も男も子供も大勢がウン／＼と押し合をして我れ先に入らうとして居るが弱いものとはとても無益さあ、強い者に踏み殺されてしまつて唯だ強いもの許り入れるのである、其大道を攀りぐる／＼廻つて登つて行くと高く聳えた大山の深い谷中に来る、山を見ると一面がダイヤモンドで太陽のやうに非常な光線を放つて輝いて居る、谷間には小川があつて、ダイヤモンドの砂の上を水が流れて居るから、何ともいはれぬ絶景さあ、然し水は赤い血の様な色であつた、岩の間に生へて居る木は非常に刺針だらけの木で葡萄の様な實がなつて居つた種は西瓜のやうに黒い色をして居る、其實のしづくが手にでも

つくと、どうしてもこうしても洗ひのける事は出来ない、其しづくが垂れて川に流れるから水の色が赤いのである、山から世界中が見えるがなかなか見ものである、山の中腹には仁王堂の様か、何年経つたか分らないごく古い恐ろしい宮がある、其入口の額に焰でサタン大王宮と書いてある、夜になると谷間には螢が星の湖水に映つて居る様に立派に飛んで居る、然し其螢にさわるゝ大焼けどをする、僕はお母さんや兄さんや妹に澤山ダイヤモンドを持つて歸らうと思ふて、輝いてるダイヤモンドを取ろうとした、すると其間から大蛇が出て来た見ると身體には文久錢の様な紋が一抔に付て居つた。其鳴き聲は、何ともかとも曰はれぬ、聞いてもぞつとずる聲を出して頭を見ると七つの頭があつて、口から長い焰の舌を出して、ニューッと僕の手の處にやつてきて、見る間に僕を喰わうとしたから、驚いて今泣いたのである、聞くと誰れでも彼でもこのダイヤモンドの谷に入つたも

のは此の大蛇に殺されるそらだよ、オー恐わかつた、僕は金もダイヤモンドも何にも入らない、オー恐わかつた、』
と泣きながら話しました、母は二人の子供に向ひ、

母『どん慾はすべて罪の根である、今夜神様は正月の始めによい事を教へて下さつたから、夢を夢と思はないで、唯だ金金といふて金ばかりに心を眩ましてはいけません。』

と云ひ終ると、時計はチンと一時を打ちました、お鶴は、

母『お母さん、もう一時です、寝ませう、私は金の事を思はないで、お母さんの側にねて、いつものやうにお母さんに孝行する夢を見ませう。』
と云ふて笑ひながら寝てしまいました。

第廿一 よい敵討

青山南町二丁目青山小學校の廣々とした運動場に、四百人も五百人も多勢の子供が面白そうに、走るもあり、跳るもあり、角力を取る腕白な男の子もあれば、温順しくしてお手玉をとる女の子もあり、勝手氣儘に遊んで居ました。が、學校の鐘がガン／＼と鳴り渡りますと、今迄遊んで居ました子供達は我れ先にと教場に入つてしまいました。

原骨先生と綽名を取つて居る三十位の丈のすらりとした、骨ばかりかと思はれる程に痩せて、顔は青白く、身に合はないぶく／＼した洋服を着、あるか、ないか、分らない様な髭をひねりながら、一冊の本を手にして、高等科二年生の教場へ入つて参りました。ニコ／＼と生徒の顔を見ながらお禮をして、

先生「諸君、先程參觀に來られた女の西洋人は、英國の女子大學の校長をして居られた御方でしたが、英國政府から依頼を受けて、日本の學校の様子を調べにまいでなされた御方です、私等の學校を見て、生徒の行儀のよい

事、教場のよく行き届いて居る事に非常に感服せられ、日本の小學校が斯く迄に全備とは夢にも思はなかつたと云ふて分外のお賞にあづかりました、そして私にこの五圓札を渡し、あなたの組で一番算術のよく出来る子供に何か褒美に買つてやつて下さいと仰やいました、あの御方は小供の教育には、非常な熱心な御方で、幼年教育の盛であるないによつて、其國の強いか弱いかを分ると仰やいました、諸君も其言葉を聞いて一層行儀正しくして日々の行を修め、生くら者にならないやうに勉強せねばなりません。』と云ひ終る間もなく、白墨を手にして黒板の前に立ち、再び言葉をつゞけ、先生「諸君石盤の用意はよろしいか、うろたへないやうによく心を静にしてお考へなさい、算術と云ふ者は、唯物の勘定をするばかりではなく、諸君の脳を練磨する爲めに教へるのです。』と云ひつゝ、左の問題を黒板に大きく遠くに居ても、誰にも讀める様にかきま

した。

「三つの学校の生徒が申し合して、品川沖へ舟遊びにまゐりました、一つの學校から三十五人づゝ参りましたが、どうしても一艘の舟に乗る事ができませんから止むを得ず其中から一番丈の高い子供を二十三丈の低い子供を十人他の舟に乗せました、そしてその多勢乗つて居る舟には赤い旗を立て、少ない方には白い旗を立て、乗り出しました、赤を旗を立て、居る舟に二百十六の饅頭を分配しましたが、一人前幾個づゝ饅頭が手に入りましたか」多勢の子供は其題を見て一生懸命に考へ初めましたから、教場は水を打つた様に静になりました、津田一太郎と云ふ子供と淺井鐵治と云ふ子供は同じ机に並んで座つて居りましたが、鐵治は非常に狡猾子供で、横目でじろくくと一太郎の加へたり引いたり割つたりするのを、のぞいて居り、いつの間にか盗み寫し、一太郎が一寸傍見する間に指に唾をつけて一太郎が考へた問題を消してしまひ、何知らぬ

顔で鐵治は大へいな顔をして、破れる様な大聲を出して手を揚げて、

鐵治「先生できました。」

先生「そうですか、こゝに來て答を書いて下さい。」

鐵治「ハイ」と云ひつゝ、黒板の前に立ち白墨で左の答を書きました。

「三つの學校から來たのは、一校三十五人づゝですから總數百五人となります。其中から丈の高い二十三人と丈の低い十三を引きますと、赤い旗の舟に残つたものは七十二人であり、其七十二人は饅頭が二百十六分配られたのでありますから一人前三つ宛であります」

先生は其答を読み、程式も答もよく出來て居りましたから、早々五圓札を鐵治の褒美として渡すと、多勢の子供は誰一人鐵治を賞めないものはありませんでした、然し一太郎は齒をくいしばつて残念がつて居りましたが、自分の答は消されて喧嘩をするに何の證據もありませんから、張り裂ける胸を押えながら

青い顔をして家に歸りますと、十八九になるおさだと云ふ姉が一太郎の様子を見て、

姉「一ちゃん、お前はどうしたの、大層顔が青いよ、気分でも悪いかねえ。」

一太郎「気分が悪いともく、胸が張り裂ける程口惜いよ、明日は一番敵討をや
るつもりだ、失敬な鐵治めい。」

姉「鐵ちゃんと言つてもしたのかエー、喧嘩はあししよ。」

一太郎「僕は喧嘩したのではないよ、盗賊されたのよ。」

姉「鐵ちゃんが何が盗つたのかエー。」

一太郎「鐵公は算術盗賊だ。」

姉「妙な盗賊だね。」

一太郎「五圓取られたエ、しま〜しよ。」

姉「ホ、ホ、ホ、一ちゃん戯談をいひでないよ、お前がど〜して五圓の大金

を持って居るものか。」

一太郎「だつて鐵公の算術の盗賊に遇つて五圓を失つたよ。」

姉「それはどういふ譯で。」

一太郎「今日學校へ英國のえらい女の御方が來られて、僕の組で一番算術のよく
できたものへ五圓、褒美をやつて呉れえといふて、先生に托んでおいでな
さつたから、先生が僕等に問題をお出しなされたの、それで僕はよく考へ
て程式と答とを書いて居ると、鐵公めがじろ〜横目で僕の問題を盗みと
り、僕が一寸傍見をして居る内に、指に唾をつけて僕の石盤に書いてある
問題を消してしまひ、僕の作つた答を盗んで、僕の褒美に貰ふべき五圓を
鐵公が横取りをしたのだ、僕も先生に其事を訴げやうとしたが何の證據も
ないので水懸け論になるから齒ぎしりを噛んで、いま〜しかつたけれど
も、今日はこらえてやつたのだ、然し明日は仇を討つ、奴はいつも算術の

答が出来ないものだから答の本を持ってきて、其答を見て先生に答えるから、其事を先生に訴けてやれば鐵公はすぐ退校さし、あしたは美事に今日の敵打をしてやるよ、僕はいましくつて何にもする事ができない、鐵公に敵を討たなくてはどうも心がすまん、此一事は僕は死んでも忘れる事が出来ぬ。

と非常な勢で、手に拳固を握りながら残念がる一太郎を姉のおさだは宥めながら

姉「一ちゃんお前に似合はない事ではないか、お母さんが常に私共に教えて下さる「悪を以て悪に酬ゆる勿れ善を以て悪にむくゆれ」との御言葉を忘れたのかエー、鐵ちゃんは今年の四月には高等小學の二年を卒業したら本町の書店に雇はれる約束がきまつて居るのである、若し悪い事をして學校から退校されたならば書店ではあの子を雇ひはしまい、其時はあの子の

お母さんはどう致します、あの子の母は長い病氣で、唯便りとして居るのはあの子獨りであるが、學校さへ卒業すれば書店に雇はれ、いくらかの助けになると思ひあの子の卒業を指を數へて待つて居るのです、若しあの子が學校から退校されるやうな事になれば病氣の母は其を苦にして死ぬに違ひはない、お前は算術盜賊に遇た位で、大切な人の生命を取るつもりかね、今日あの子に五圓の金が入つたと云ふ事は、お前が五圓を貰つたよりは百倍の役目をして居ります、あの子の母はあのお金で暫く飲まなかつた薬も飲み、又卵子の一つも餘計にたべたに違はありません、其に敵討とは何事でありませぬ」

と姉の言葉が一太郎の心を非常に感化し今まで悪い口惜い、どうかして敵討つてやらうと思ふた心は全くなくなり、鐵治を憎むよりは反つて鐵治の病氣のお母さんを思ひ、打つて變つて鐵治を愛する心は非常にまして參りました。

明くる日學校に行きますと、鐵治はきまり悪そうに、一太郎に顔向けしませ
ん、今に一太郎から何か敵討ちをされると思い、顔を青くしてびく／＼して居
りますと、一太郎は鐵治の側に行つて、

一太郎「鐵ちゃん、お母さんの病氣はどうかねー。」

鐵治は一太郎のやさしい深切な言葉をきき、顔を赤くしてうつむきながら、

鐵治「はい難有う、少しはよい様です。」

一太郎「其は結構です、之は少いですが僕がお父さんから毎月小使に二十錢づつ、
貰つたのを郵便切手で貯蓄をしてためた金です、三圓あります、どうかお

母さんの欲しいものを買つてあげて下さい。」

と云ふて出すと、鐵治は可笑しな顔をして居りましたが、押え切れなないと見え、
不意にワァーと泣き出しました、やゝ暫して、

鐵治「一ちゃん、昨日は僕が悪るかつた、君の頭から出た答を盗んですみませ

んでした、もうこれから心を改めて決して人の物を盗みなんかはいたしま
せん、どうか赦して下さい、僕は君の親切は拳骨でぶん撲られたよりは痛
いですが、心が張り裂ける程痛いんです。」

と云ふて謝まりこれよりは鐵治はよい生れ變つた子供となり、學校を卒業し書
店に雇はれ、ある丈けの心を盡くして病氣の母を大切にいたしました。

一太郎は心の中で、あゝよい敵討ちをした、善を以て悪に酬ゆるは一番よい
敵討ちであると云ふ事を悟りました。

第廿二 朝ねぼりの結果

母「春や／＼／＼コレ春や、もう起きないと學校が後れるよ、これ春や／＼。」
と、春太郎は阿母さんに起されましたが、ウーンと云ふたばかりで、中々起る
様子もありませんでした。

下女「坊ちゃん、もうお起きなりませんと、學校が間に合ひませんよ、坊ちゃんお起きあそばせ、唯今お隣の早川さんが、お誘にいらしやいましたよ。」
と、下女の御竹にまでも揺り起されましたが、春太郎は夢の様に

春「イーヨ、起ると言つたら起るよ、左様揺らなくつてもイーヨ。」

と云ふたばかりで、スウ〜と云ふて、中々目が醒める様子がありませんでした、すると奥の部屋から父は

「春太郎、まご〜して居ないで起きないか、もう八時半過ぎで居るではな

いか春太郎コレ春太郎」

春太郎も雷の様な、阿父の聲と、八時半過ぎと聞いて、目をこすり〜起きて見ると早や、九時に十五分前です、これは大變と、烏が顔を洗ふ様に、顔をチヨポ〜と洗つて、サアお竹お膳〜と火事場の様に、いそぎ立て、いやあ汁が、からいとか、御膳が堅いとか、お茶がぬるいとか、何んとかかとか、ひ

やみにお竹に八つ當りに當りつけ、飛ぶ様に走って學校に参りました、いかにお人よしのお竹も、斯様にむやみに、八つ當りに當られては、餘り心地も良くありませんから、顔には出しませんが、心の中では非常に、角を出して、臺所で洗物をしながら、語をも言はずに、怒つて居りました、すると猫がニャ〜といふて、何か食べたいといふ風で、尾を振りながら、お竹のところへ参りました、常とは違つて、お竹は

お竹「やかましいよ、いくらニャ〜と云つても何んにもないよ。」

猫「ニャア〜〜。」

お竹「うるさいよ。」

猫「ニャ〜〜。」

お竹はやかましいねへ、といひながら、猫の頭を、げんこでコツリ〜と打ちますと猫は

『いたゞ、ニャ、いたゞニャ〜』
と大聲で泣きましたから、奥の部屋で仕事をして居つた、奥様はお竹や〜猫は如何したの！

お竹『此の畜生は仕方がありません、夜になると、臥てばかり居て、一疋でも鼠を取つた事はなく、ご膳ばかり呉れ呉れと、云つて仕方がありません、しよをのない猫です。』

とお竹は罪もない猫に、自分の腹立を、坊ちやまの頭は、打けませんから、猫の頭をコッ〜〜たゝいて、よい氣ばらしを致しました。

如何に畜生だからといつても、これをひやみに其の頭をコッ〜〜打たれて、黙つて居る者はありません、猫は恐ろしい顔をして、ノッ〜〜と、天井にあがつて、晝間であるに天井中をドサ〜〜〜と鼠狩りを始めましたから、鼠も猫から不意打を食つて、チヌウ〜〜、バタ〜〜と、十疋も、二十疋も、三

十疋も天井で臥て居つた鼠は、猫に追はれて駆け出しましたから、たまりません、家の内は、塵の雨が降つて来て、家内中大そふどうになりました。

語變つて、春太郎は餘り、急いで走り出したものでありますから、泣面に蜂の例へで、途中で、下駄の鼻緒がされて、倒で足をけがをし、其上額に大な、こぶをこしらへました。

學校に行つて見ると、もう九時過ぎで課業は既に初まつて居り、先生始め多勢の生徒は春太郎が、びつこを、ひきながら、泣き顔をして、額の大な瘤をなげながら、講堂に入つて來るのを見て、クス〜、と誰れが笑ふとなく、皆んなが遂に吹き出しました。

春太郎は席に坐つて、持つて來たかばんを開けて見ると、昨日家に持つて歸たきりで、温習もせず、何にもしませんでしたから、昨日の學課の書物は、昨日の學課の書物は、一冊も入つて居りませんでした、先生から、『春太郎さ

ん、今日の學課の御本は、如何いたしました」と、云はれて、まさかに朝ねぼ
うを致しまして忘れましたと、いえず顔を赤くして頭をたれました。

運動の時間に、なりましたから、運動場に行つて、見ると、多勢の小供が、
勢いよく、はねたり、おどつたり、面白さうに遊んで居りますが、春太郎獨
りは、足を傷めて走る事も出来ず、はねる事も出来ず、おどる事も出来ず、つ
まらない顔をして、人の面白さうに、遊ぶのを、茫然として見て居りました。

十二時になりましたから、お辨當を食へ様と思つて、食堂に行つて辨當をあ
けて見ると、家を出る時、餘り急いで駆け出したものでありますから、空辨
當を下げて参りましたから、食へるものは、なんにもありませんでした。然し
人には、食へた様な風をして早々食堂から、さまりの悪るさうに、飛で出まし
た。

三時頃ちんばを引きながら、額の大な瘤をなせながら、お腹をへらして、家

に歸りました。

阿父は春太郎が、學校から歸つて來たのを見て

父「春太郎、今日は學校の時間に合つたか」

春「ハイ〜〜」

父「ハイ〜〜では解りません、九時に始まる學校を、八時四十五分まで寐て
居て、どうして學校の間に合ひます、それに外分の悪い買つたばかりの
下駄の鼻緒は切らす、其上額に大こぶをこしらいて何んと云ふ事でありま
す、是もみんな朝ねぼらの結果であります、楠正成は「鷄鳴に起きざれば
日暮て悔あり」とおつじやつたおまい楠公の言葉がよく今朝は胸にをちた
であるふ、鷄鳴に起きれば日暮に何にも悔いる事はいらぬ、ロシヤのビー
トル大帝は「吾が生命を長くせんと欲する者は、寝を少なくせざる可から
ず」とおしやつた、朝ねぼらする子供は一年にどの位損をするか知れぬ、

フランクリンと云ふ人は、「遅く起きる人は終日走らざる可からず」と云はれたが、ほんとうにそうである、おまいが朝早く起きさいすれば、道を走つて學校へ行くに及ばない、そうすれば下駄の鼻緒を切らしこぶもこしらへなかつたのだ、英國の諺に「朝の時間に黄金充滿す」とある、又「朝起は人をして健康ならしめ、富裕ならしめ、聰明ならしむ」とある、朝ねばうの子供に限ぎつて金満家になつたためしはない、一生涯貧乏で暮らすのである、又身體の丈夫な人も伶俐の人もない、日本の諺にも「朝起家には福来る」と云ふ事があるではないか、昔から何處の國でも偉い人になつた者は、皆朝起の人であつたのであります」

と父は春太郎に咬着く様に怒りもせず、言葉靜かに物を噛んで食べさせ様々に、朝起の機能を、君子や、學者や、王様の、言葉を引いて善く云ひきかしましたから春太郎も深く今までの朝ねぼうを悔ひ、非常な決心をして神の助を願つて、

朝ねぼうの春太郎も、たいした朝起き春太郎と變りました。

第廿三 五萬五千圓

深井お花と云ふ今年取つて八ツになる小さな子供が、或日會堂に参りますと、どこからどこまでも人が一杯で、どこからくゞつて入らふとしてもどうしても入る事が出来ません、そうこうする間、なかでおもしろい音楽が始まりました、せいびをしても中々何にも見えません、お花も非常になんかしくなつたものを見え、ワアと、大聲出して泣き出しました、わきに居つた教師は驚いて見ると、小な子供がワア／＼泣いて居りますから

「なせ泣くの、何かけがでもいたしましたか、又おとしものでもしましたか」

お花「イヤー何もをどしもけがもいたしません。」

六月か八月もかゝつたらできませう、併し其たてる前には、お金を募らなくてはならんよ。」

花「先生私もお出しませう、今日からためてウント出します、獨力でも會堂を建てます、他の子供も入れなかつたら、泣くに相違ありませんから早く建てたいです。」

と云ふて其まゝ家に歸つてゆきました、家に歸つてお花はおかあさんに向ひ

花「お母さん、今日會堂に行つたら人が一杯で入る事ができなかつたから、

私がお金をためて、廣大な會堂を建てるつもりです、だから今日よりお使にゆく度毎一錢づゝくださいよ。」

母は早くよりおつとに別れ、人様のせんたくやぬいものをして、漸々の事でまずしい暮しを爲て居りました、それですからお花に使にやる毎に一錢づゝやるは、非常困難事で、其をするには、自分のたべるものも今までの様に食へる

事は出來ず、苦みの上に苦みを重ねる事でありましたが、母親もお花の熱心に非常に感心し、自分の食へる物もろくにたべずに、お花を使にやることに、一錢づゝやつて居りました、お花は一錢もらふ度に、近所の貯蓄銀行にあづけて居りました、銀行の役員は毎日一度か二度は必ず、まだ八ツにもなるかならない子供が、一錢づゝ預けにくるので不思議に思ふて居ました、其様子を見ると穢い下駄をはき、洗濯はしてありますが、片々につきがあたつた、ぼろ／＼の衣服をきて、悦しそうちに、毎日一錢か二錢たまるのを見て、ニコ／＼して居ました、銀行員もこれを見るにつけ、國に預蓄銀行の大切な事を一層に感じました、お花も八ツの子供にしては非常に感心であります、明けても暮れても、神様に祈り一日も早く金があつて早く廣大な會堂の出來る様に、願つて居りました、母親も使毎に一錢づゝ出すのに困難でしたが、お花の熱心と根氣のよいには非常に感服し未たのもしく、お花が立身して後には、女ながら偉いもの

になつてくれるのを何よりの喜びとして居りました、處が可愛そな事になりましたの、お花は始めに流行性感胃をひきました、遂に非常な大病となり、お醫者に今日にもむづかしいと言ふのです、お母さんの驚きは一方でありませぬ、早速教師の元に、大病の由を申送りしました、教師も愕然してかけてきました、見るとお花に言葉も、ろくに云ひませぬ、此有様に教師に一層驚きました、併しお花は教師の顔をじつとながめ

花「先生私はもう死にます、會堂をたてよふと思ひ毎日お母さんから貰ふたお金は銀行に預けてあります、五十五錢たまりました、どうか銀行から出して五十五錢を會堂を建築爲めに費消してください、どうか願ひます、私の願は會堂の出来る事でありませぬ。」

と云ふたぎり、スヤ／＼睡りました、教師は銀行に行き五十五錢のあづけ金を引き出して其金をもつて、夜の集會の會堂へ行きました、二三百人も集會人がありました其席で、教師は熱心に、涙をポツリ／＼と流しながら、お花の話をして五十五錢の錢を見せませぬ、満堂なかぬものは一人もありません、お花の熱心は確かに満堂を感心させました、十五六になる秀吉と云ふ青年はなきながら立ちあがり

秀「私は銀行におちさんからもらつた、金が五圓五十錢預けてありますから、お花さんの五十五錢を十倍にして、五圓五十錢、會堂を建築爲に出します。」

と申しました、すると二十二三の立派なお嬢さんが、目に「ハンケチ」をあてながら立ちあがり

嬢「私は先日母のなくなりましたとき、かたみにもらつたお金がありますから、お花さんの五十五錢の千倍にして五百五十圓を寄附いたします。」
と云ひました、すると三十位の商人風の若旦那が、非常に感心したものと見え、

ふるえ聲を出しながら、

問「私も花さんの五十五錢を萬倍して、五千五百圓を喜んで寄附致します。」
と申しました、次に立つた人は、白髪頭の老人で、此人は花が五十五錢を預けて置いた、貯蓄銀行の頭取でありました、常に花が、每日一錢づつ、銀行にあづけにくる、感心な話をきいて居る上この夜又其ために金は、會堂を建築に出したのだと云ふ話をきいて感心したのしないどころでありませんから、いさなり

頭「私も花さんの五十五錢に十萬倍して、五萬五千圓を出します。」
と申しました、お花の五十五錢が元金となつて、東京の中央に立派な會堂が出来ました、八ツになる小供でも、たとへ五十五錢の僅かな金でも、熱心と根氣があれば、何んでもできない事はありません、立派な、廣大な、會堂のかへに、立派な額に、五十五錢がかざつてあるのは、お花の熱心と根氣を後の人に知らせ

る爲めであります、お花は教師から夜の十一時頃五十五錢が元金となつて、何萬と云ふ大金が即座にあつまつた事、又愈々近日の内に廣大な會堂のできると云ふ事を聞きました、其喜びが何により藥となつて、醫者がひづかしいと思ふた病氣も全快つて、會堂の落成つた祝の日は、お母さんの手に引かれて、にこ〜と笑ひながら、會堂に集まつて非常に喜んで居りました。

第廿四 花の駝背

四谷原小学校といふ旗を立て、五六十人の子供が、五月の晴朗な天氣の日に、飛鳥山に遠足に出かけました、其子供の中に、十一二歳になる哀れな駝背の子供が、足を引き摺りながら、後れ〜〜〜従って行きますと、悪戯な子供は、色々の悪戯をして駝背の子供をいじめて楽しんで居りましたが、庄吉と云ふ生意氣なすれつからしの子供は、